

平成 29年度 宇都宮大学 卒業論文

幅広い人間関係や所属集団を持つことの
必要性について

—幼児期の仲間集団・高校までの学校外の居場所・大学の環境と課
外活動の観点から—

教育学部 総合人間形成課程 地域公共領域 4年

141612A

川崎 志織

社会学研究室

指導教諭 小原一馬先生

目次

はじめに

第1章 幅広い人間関係と所属集団とは何か

第1節 全体の概要

第2節 人間関係のあり方と集団の性質

第3節 インターネットは居場所になるか

第4節 子どもの能力・性質の定義

第2章 幅広い人間関係と所属集団を持つことの必要性について

第1節 幼少期の仲間集団と親の持つネットワークの必要性

第2節 小学校～高校での問題と家庭と学校以外の居場所の必要性

第3節 大学の可能性と大学での学科以外の居場所の必要性

第4節 仮説

第3章 調査

第1節 調査方法

第2節 アンケートの分析・考察

第3節 学生にインタビュー

第4節 アンケートとインタビューのまとめ

第5節 実際の居場所

第4章 総括 ～選択的な居場所の必要性について～

謝辞

参考文献

調査資料

はじめに

友人を作る場といえば、幼児期は幼稚園や保育園、学生時代は学校が主になっている。

しかし、学校での人間関係がよいものでない場合もある。幼稚園や保育園でも周囲と比較されることや、周囲に合わせなければならないことがあるし、学校ではスクールカーストやいじめといった問題が話題になることがある。私自身、中学校ではスクールカーストやいじめが存在し、劣等感を感じるがあった。スクールカーストが存在する中では、身分不相応なふるまいをすると、いじめられてしまうという恐怖から、自分から人に話しかけることを躊躇するなど、自分らしく振舞えなくなることを実感してきた。また、クラス内に存在するグループが重要で、グループの人に依存しなければならない状況だった。この中学校での経験は、自分の人格に大きな影響を与えたと感じる。劣等感や、他者への依存が大きくなってしまったと感じる。

しかし、私は大学で、幅広い世代の人と交流でき、自分の意見が言いやすいサークルに所属したことや、大学の人間関係が楽で、他者と比較される機会がなかったことにより、多少、それが改善された。いじめられるという恐怖や、またどんなことがあっても必ず行かなければならないために失敗できないという恐怖があった中学校などとは異なる環境であったため、以前の自分とは異なる自分になることが出来たと感じた。

そこでもし、中学校のころから、そのようにしがらみがなく、抑圧されない環境があったとしたら、より成長できたのではないかと感じる。

小学生の頃からそのような居場所があったという人に話を聞くと、学校ではおとなしい性格だったが、居場所での経験から、自分から人に声をかけることができるようになったという話を聞くことが出来た。

そこで、この論文では、学校のように、しがらみがあり、抑圧された場所だけに所属し、そこでの人間関係に依存するのみでは、問題があり、その他に逃げ道となるような居場所があることで、個人にとってよい効果があるのではないかということを検証したい。

また、しがらみがなく、抑圧されない居場所とは、どのような居場所かということを検証したい。

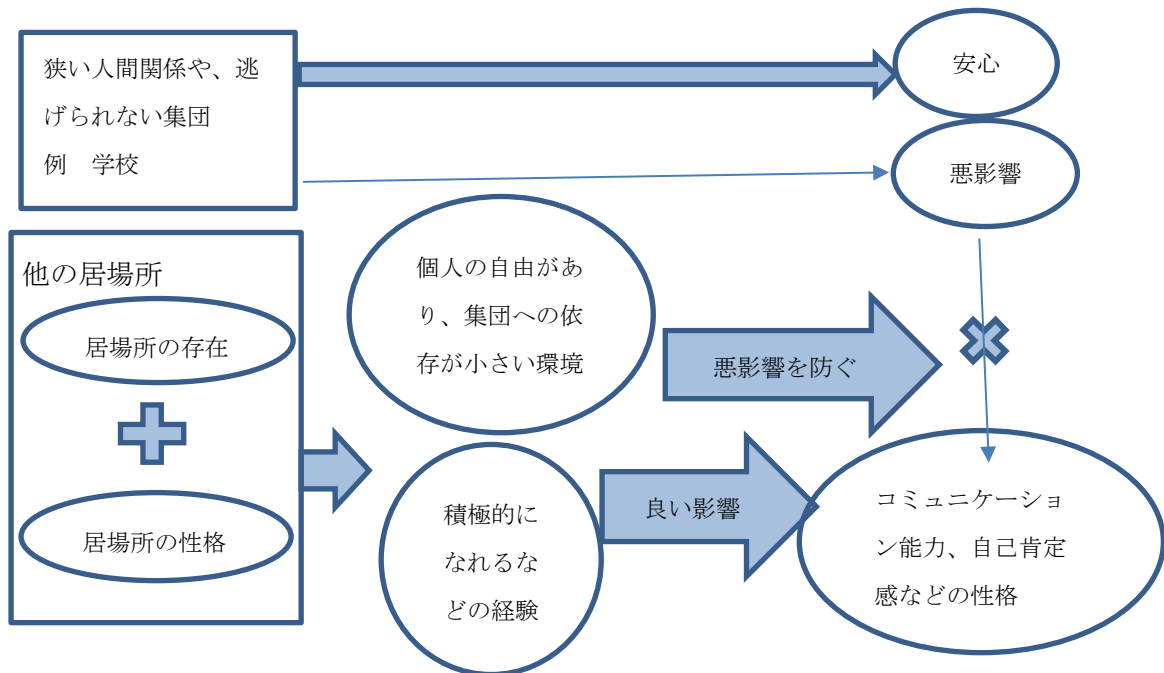
第1章 幅広い人間関係と所属集団とは何か

第1節 全体の概要

私は、幅広い人間関係や、自らが選択して所属する集団を持つことで、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境ができ、しがらみがあって集団に依存してしまう環境ではできない経験ができると考える。

また、居場所の性格は様々であるため、例えば、学校以外の居場所で学校ではできないような経験ができるというように、居場所ならではの経験もできると考える。これらの経験によって、人はより成長することができると思う。また、狭い人間関係や、限られた居場所の環境による悪影響を防ぐことができると考える。

本論では、幅広い人間関係や、自らが選択して所属する集団を持つことによる効果を検証したい。また、効果があるような居場所の性格や居場所での経験とはどのようなものかを考えたい。



第2節で詳しく説明するが、幅色い人間関係を持つことで、狭い人間関係よりも、しがらみや、依存が少なくなる。

自らが選択して所属する集団では、嫌になっても辞めることができない集団よりも、しが

らみや依存が少なくなる。

そのため、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境ができると考えられる。このような環境がある方が、気軽に人と関わることができたり、積極的になることができたり、安心できたりすることができると考えられる。気軽に人と関わることができたり、積極的になることができたり、安心できたりするというような経験には、効果があると考えられる。

反対に、「個人の自由が無く、集団への依存が大きい」環境で想像することができるのは、スクールカーストのある学校のクラスのような環境だが、そのような環境により、人は自分と同じようなタイプの人としか付き合うことができなくなったり、周りに合わせることを過度に求められたり、不安が大きくなったりすると考えられる。このような環境は個人に劣等感を抱かせるなど、個人の性格等に悪影響を及ぼすと考えられる。「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境を別に持つことで、この悪影響を防ぐことができるのではないか。

また、居場所の性格による経験として、例えば、学校では、自分を認めてくれる人がいなかったり、人と協力するような経験ができない場合も、自分を認めてくれる大人が多く存在する居場所であったり、チームワークを大切にするような居場所であれば、そのような経験ができる。居場所が学校や家など、限られた場所以外にもあることにより、違った経験をすることがあり、その経験に効果があると考えられる。

住田・高島（2010）によると、子どもが成長するまでに所属し、経験を共にする集団は、家族集団→仲間集団→学校集団→職業集団となっている。

私は、これをもとに、①幼少期②小学校～高校③大学の3つの年代に分けた時に「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」場所や、良い経験ができる場所とは何かを考えた。

- ① 幼少期では、近所の子ども同士の仲間集団と、親の持つネットワークによりできる関係が、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境を作ることで子どもの性格に良い影響を与えると考えた。また、親以外の大人に認められる機会など、家庭や学校とは異なる経験をさせることで、子どもの性格に良い影響を与えると考えた。
- ② 小学校から高校までは、学校では、周りとうまく付き合うために、空気を読むことが重要視されることは一般的に知られている。鈴木（2012）の示したスクールカーストや、須藤（2014）らが示した固定されたグループによる問題もあり、窮屈さを感じる子どもがいる。そこで、私は家庭と学校以外に**第1章・第2節**で紹介するような居場所を持つことで、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境での経験ができ、子どもが成長することができることや、学校での問題による悪影響を防ぐことができると考えた。また、居場所の性格によっては、自分を認めてもらえる機会や、チームワークを大切にする機会や、初対面の人と関わる機会があるなどの経験ができるため、

性格に良い影響があると考えた。

- ③ 大学は、小学校から高校までに比べると、固定されたクラスがなく、人間関係が比較的
自由である。そのため、大学は、高校までよりも、「個人の自由がある程度あり、集団へ
の依存が小さい」環境となっており、性格に良い影響を与えることがあると考えた。ま
た、大学でサークル活動やボランティア活動など学科以外の居場所を持つことによっ
ても、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境が作られることや、居場
所の性格によって、チームワークを大切にする機会や、初対面の人と関わる機会がある
などの特定の経験ができることがあり、性格に良い影響があると考えた。

私は、居場所の存在や、居場所の性格による経験により、以下の8つの能力や個人の性質
を良い方向に持っていくことができる、または、悪い方向へ向かうことを防ぐことができ
ると考えている。以下の8つの定義については**第1章・第4節**で説明する。

- ①**コミュニケーション能力**が向上する、または低下することを防ぐことができる。
- ②**自己主張能力**が向上する、または低下することを防ぐことができる。
- ③**自己抑制能力**が向上する、または低下することを防ぐことができる。
- ④**自己肯定感**が向上する、または低下することを防ぐことができる。
- ⑤**向社会性**が向上する、または低下することを防ぐことができる。
- ⑥**他者への非排除性**が向上する、または低下することを防ぐことができる。
- ⑦**他者への信頼感**が向上する、または低下することを防ぐことができる。
- ⑧**他者への依存**が弱くなる、または強くなることを防ぐことができる。

幼少期の近所の子ども同士の仲間集団と、親の持つネットワークによりできる関係が、コ
ミュニケーション能力 (①)、自己主張能力 (②)、自己抑制能力 (③)、自己肯定感 (④)
を向上させると考えた。

自己主張能力 (②)、自己抑制能力 (③) については、松田 (2010) が、両親が非親
族のネットワークを持っていることで子どもの幼少期の自己主張能力 (②) が高まることと、
両親が親族のネットワークを持っていることで子どもの幼少期の自己抑制能力 (③) が高ま
ることを示していた。その他にも、私は、親以外の大人と関わることや、自由な環境の中で
遊ぶことによるコミュニケーション能力 (①) の向上や、親以外の大人から認められる経験
をすることによる自己肯定感 (④) の向上があると考えた。

小学校から高校までの家庭と学校以外の居場所での経験が、コミュニケーション能力
(①)、自己主張能力 (②)、自己肯定感 (④)、向社会性 (⑤)、他者への非排除性 (⑥)、
他者への信頼感 (⑦) が向上することを助けたり、低下することを防いだりすると考えた。

学校では、鈴木 (2012) が示したように、学校のスクールカーストにより、コミュニ
ケーション能力 (①) や自己主張能力 (②) や自己肯定感 (④) が低くなることや、

須藤（2014）らが示したようにクラス内の固定されたグループにより、他者への非排除性（⑥）や他者への信頼感（⑦）が減少したり、他者への依存（⑧）が強くなるようになるという問題がある。学校以外の居場所が逃げ道となれば、そのような学校の問題による性格への悪影響を防ぐことができると考えた。

また、学校以外の居場所の性格によっては、自分を認めてもらえる機会や、チームワークを大切にする機会や、初対面の人と関わる機会があるなどの経験により、性格に良い影響があるのではないかと考えた。

大学では、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境であることで、気軽に人と関わる経験ができる。また、大学でサークルなどの学科以外の居場所に所属することにより、居場所の性格によっては、自分を認めてもらえる機会や、チームワークを大切にする機会や、初対面の人と関わる機会があるなどの経験ができる。そのため、大学では高校までよりも、コミュニケーション能力（①）、自己主張能力（②）、自己肯定感（④）、向社会性（⑤）、他者への非排除性（⑥）、他者への信頼感（⑦）が向上する機会があるのではないかと考えた。

第2節 人間関係のあり方と集団の性質

私は「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境により、気軽に人と関わることができたり、積極的になることができたり、安心できたりする経験ができると考えている。

「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境ができるために、私は「人間関係のあり方」と「集団のあり方」が重要であると考えた。

人間関係のあり方として、人間関係の範囲が狭いと、しがらみが生まれやすく、自由が小さくなりやすいと考えられる。

所属する集団のあり方として、嫌になっても辞めることができない集団では、好きに辞めることができる集団よりも、しがらみがあり、自分を守るために周りに合わせなければならぬことがあるなど不自由だと考えられる。

ここで、人間関係のあり方として、「橋渡しの関係と結束型の関係の概念」を、集団の性質として、「選択的な居場所と拘束的な居場所の概念」を紹介したい。

第1項 結束型の関係と橋渡しの関係

安田（2008）によると、結束型の関係とは、相互に密にかかわる人々が、結びつくものだ。例えば、学校のクラスの固定された仲良しグループなどがそれに当たる。

これに対して、橋渡し型の関係とは、異なる集団を結びつけるようなものだ。例えば、学校のクラス内の固定されたグループ間を結びつける人などがそれに当たる。社会全体で見

ると、学校以外に習い事などの居場所がある人は、学校以外の人間関係と学校の人間関係をつなぐ、橋渡しの関係を作っていると言える。

【結束型の関係】

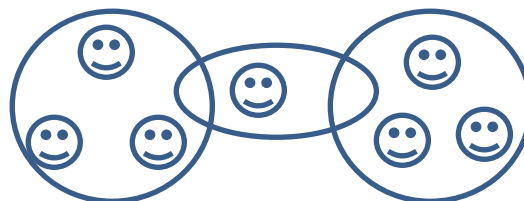
集団 A



【橋渡し型の関係】

集団 A

集団 B



これらの関係には、どちらにもメリット・デメリットがある。結束型の関係は、安定した信頼関係がある反面、内部指向で排除性が強く、しがらみが生まれやすい。橋渡し型の関係は、多様性があり、自由である反面、安定した信頼関係がない。

そのため、結束型の関係を持ったうえで、橋渡し型の関係も持ち、安定した信頼関係も、幅広い人間関係も持つことで、安定した信頼関係で問題があった場合の逃げ道を作ることができると考えられる。それにより、過度に狭い人間関係に縛られ、気にしすぎることがなくなり、個人にとって、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境ができると考えられる。

これに当てはめると、幼児期に、家庭と幼稚園以外に人とのつながりがあることや、高校までに家庭と学校以外に居場所があることは、安定した関係もありつつ、橋渡しの関係が作られるため良いと言える。また、大学は、高校までと異なり、規模が大きく、固定されたクラスが無いために、結束型の関係もありつつ、橋渡しの人間関係が生まれやすい環境であるため良いと言える。また、学科以外にサークルなどの学科以外の居場所に所属することは、学科と課外活動の集団をつなぐ、橋渡しの関係を持つことができるため良いと言える。

第2項 集団の性質について

「集団の性質」に関連するものとして、住田・高島（2010）は、子どもが所属する集団を、フォーマルか、インフォーマルか、選択的か拘束的かで分類した。

	選択的	拘束的
フォーマル	地域集団	学校
インフォーマル	近隣集団、仲間集団	家族

例えば、家庭と学校は、子ども自ら辞めることを選択できないような居場所であるため、拘束的な居場所だ。

選択的な居場所には、地域集団、近隣集団、仲間集団がある。地域集団とは、地域の組織された団体に所属して活動するようなものだ。ボーイスカウト、地域のスポーツ団体、地域子ども会などが例に挙げられる。近隣集団には、友達の両親や、母親の兄弟などが当てはまる。仲間集団とは、近所の子供たちで自由に形成されるようなものだ。

また、上野（2009）は、地縁・血縁・社縁と異なり、参加・離脱が可能で、社会で背負った役割から自由になりえる縁として、「選択縁」を定義している。上野（2009）の「選択縁」の定義に当てはめても、家族と学校は、選択できない縁であり、地域集団、近隣集団、仲間集団は、「選択縁」である。

選択的な居場所は拘束的な居場所よりも、嫌になったら辞めることができるため、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境になると考えられる。

これに当てはめると、幼児期の仲間集団や、高校までの学校以外の居場所、大学の課外活動の集団などは、幼稚園・保育園や、学校よりも、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」集団であると考えられる。

第3項 人間関係のあり方と集団の性質の関係性

第1項で紹介した結束型の関係・橋渡しの関係と、**第2項**で紹介した拘束的集団・選択的集団は対応するものではない。例えば、少人数の塾という選択的集団の中で結束型の関係ができることもあれば、学校のクラスという拘束的集団の中で、橋渡しの関係ができることもある。このように人間関係のあり方と集団の性質は別のものだが、橋渡しの関係は結束型の関係よりも、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境を作り、選択的集団は、拘束的集団よりも「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境を作ると考えられる。そのため、結束型の人間関係だけでなく、橋渡しの関係もあった方が幅広い人間関係ができて良いのではないかとということと、拘束的集団だけでなく、選択的集団にも所属していた方がしがらみのない自由な環境での経験ができて良いのではないかとということを考えたい。

第2章で紹介するが、人間関係のあり方や集団の性質から、居場所の存在によって「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境が得られるものとして、以下が考えられる。

①幼児期仲間集団と親の持つネットワークによる関係は、選択的であり、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境になると言える。

②高校までの家庭や学校以外の居場所は、選択的なものであるし、居場所があることによって学校以外の人間関係と学校の人間関係をつなぐ橋渡しの関係ができると言えるため、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境になると言える。

③大学は、規模が大きく、固定されたクラスがないために、結束型の関係もありつつ、橋

渡し的な人間関係が生まれやすい環境である。また、学科以外にサークルなどの課外活動を行うことで、学科と課外活動の集団をつなぐ、橋渡し的な関係を持つことができる。そのため、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境が作られると言える。

第3節 インターネットは居場所になるか

私達の友人関係は、学校の仲良しグループの友人など、結束的な関係が主になっている。橋渡し的な関係はそれに比べると弱いつながりであることで、効果があると考えられる。

学校外の居場所の友人とは、学校の友人と比べて接する時間は短いため、親友になることは難しい。しかし、接する時間が短いからこそ、学校の友人には周囲を気にして相談ができないようなことを相談できることがある。

このように、橋渡し的な関係は、弱いつながりであることで効果があると考えられるが、弱すぎても意味がない。その主な例がインターネットを通じての人とのつながりだ。

インターネットではほとんどしがらみがなく、嫌になったらすぐに関係を切ることができるので、現実では発言できなくとも、SNS上では、自分の言いたいことが言える若者も居る。しかし、インターネットは匿名であるために、悪意があることも簡単に言うことができ、嫌になったらすぐに関係を切ることができ、信頼関係を築くことは難しい。このため、インターネットには、橋渡し的な関係の効果はないと考えられる。例外として、インターネットを通じて知り合い、会うことで、現実のつながりになることがある。それには橋渡し的な関係の効果があると考えられるが、本論では、インターネットに効果があるとは考えないものとする。

第4節 子どもの能力・性質の定義

私は、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境による経験と、居場所の性質による経験により、以下の8つのことが起こるのではないかと考えている。

- ①**コミュニケーション能力**が向上する、または低下することを防ぐことができる。
- ②**自己主張能力**が向上する、または低下することを防ぐことができる。
- ③**自己制御能力**が向上する、または低下することを防ぐことができる。
- ④**自己肯定感**が向上する、または低下することを防ぐことができる。
- ⑤**向社会性**が向上する、または低下することを防ぐことができる。
- ⑥**他者への非排除性**が向上する、または低下することを防ぐことができる。
- ⑦**他者への信頼感**が向上する、または低下することを防ぐことができる。
- ⑧**他者への依存**が減少する、または増加することを防ぐことができる。

この8つの能力・性質とはどんなものかについて説明すると、

①コミュニケーション能力とは…

高松（2006）は、コミュニケーション能力が高い人について、「初対面の相手でも、適切な人間関係を素早く構築でき、対話や交流が円滑かつ巧みで具体的な対応も迅速かつ的確で仲間からの信頼が厚い人である」と定義していた。

これに当てはめると、「初対面の相手や自分が詳しくない話題への対応に苦を感じず、人と交流することを好み、自分から関わっていくことができる人」は、コミュニケーション能力が高いと考えられる。会話する能力と、社交性の両方を持ち合わせた人がコミュニケーション能力が高いと考えられる。

②自己主張能力とは…

自分の意見を主張したり、積極的に行動したりする力のことだ。

「他人と違う意見でもいうことができたり、間違っている友人を注意することができたりする人」は自己主張能力が高いと考えられる。

③自己抑制能力とは…

自分の感情などをコントロールする力のことだ。

「悪いと言われることや、自分で悪いと思うことをしてしまう人」は自己統制能力が低いと考えられる。

④自己肯定感とは…

自分のあり方を積極的に評価できたり、自分の価値や存在意義を肯定できたりする感情のことだ。

「自分には優れた部分があり、自分には価値がある」と感じている人は自己肯定感があると考えられる。

⑤向社会性とは…

井上・久保（1997）によると、向社会行動とは、人がお互いに助け合うことだ。

「困っている友人を助ける人」や「困っている見知らぬ人を助ける人」は向社会行動をしていると考えられる。

⑥排除性とは…

長谷川（2014）によると、自分と合わないと感じた相手を仲間外れにしたり、相手に壁を作ったりすることである。

「自分と異なるタイプの人に壁を作ったり、自分に合わないと思った人を仲間外れにす

る人」は排除性があると考えられる。

⑦⑧他者への信頼と依存

山岸（1999）によると、信頼は、「明日も日が昇る」のように、規則性に対する期待と、「妻は浮気をしない」のように道徳的社会的秩序に対する期待に分けられるが、ここでは道徳的社会的秩序に対する期待のみを対象とする。道徳的社会的秩序に対する期待は、能力に対する期待と、意図に対する期待に分けられる。能力に対する期待は、例えば、飛行機に乗るとき、パイロットは飛行機を操縦できると信じるものだ。意図に対する期待は、夫が浮気をしないと信じるときに、夫は浮気をする能力がないわけではないが、自分を愛してくれているから浮気をしないと信じるように、相手の意図を信じるものだ。ここでは、意図に対する期待のみを対象とする。学生の身近なところでは、「友人は、自分を嫌いにならない、自分にひどいことをしない」と信じるのが信頼に当たると考えられる。

依存とは、過度に固執してしまったり、それしかないと考えてしまったりすることだと考えられる。山岸（1999）によると、集団で誰かに依存すると、それ以外の人への信頼が低くなるということがある。その問題点は、依存しなければ他の相手から得られるはずの利益が得られなくなることだ。例えば、クラスの友人が、誰かをいじめようといひだして、自分は不本意でも、他の相手と仲良くできることは考えられないから、従ってしまうという状況が考えられる。

山岸（1999）によれば、日本人は、アメリカ人と比べ、「広くつきあうこと」が苦手である。例えば、**第2章・第2節**で詳しく説明するが、中学校のクラスで固定された仲良しグループが出来た時、それ以外の人との交流が少なくなる傾向にある。「最初から付き合い合う相手を信頼しておらず、徐々に信頼していく」ことが日本人の特徴といわれている。反対にアメリカ人は、仲良くない人にも挨拶をすることが多いし、広く付き合う傾向にある。「最初は信頼して、何かあれば信頼しなくなる」ことが特徴だ。「信頼がなく依存してしまう」環境とは、学校のクラスで排除されることを恐れて仲良しグループに入るが、グループ内の友人のことも信じる事が出来ずにストレスを感じ、グループ以外の人たちとは仲良くできると考えられないために、グループ内の人間関係に過剰にこだわり、人に合わせ、自分の意見を言うことが出来ないというような状況が想像できる。「信頼があり、依存がない」状態とは「友人が自分を嫌いになるのではないかと不安になることなく友人と仲良くすることができ、仲が良い友人以外とも積極的に関係を作っていけること」だと言えるだろう。

なぜ「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境による経験と、居場所の性質による経験があることにより、この8つのような効果があるかと考えたかについては、**第2章**で説明したい。

この8つがよい方向に成長するためには幼児後期までに形成されなくてはならない部分が大きく、そのために大きな役割を果たすのは家族だという仮説がある。

例えば、エリクソン（1999）によると、人間が健全で幸福な発達をとげるために各段階で達成しておかなければならない以下の課題があり、家族によりよい影響が受けられないと成長が阻害されてしまうという。

乳児期	0～2歳	基本的信頼	母親
幼児前期	2～4歳	自律性	両親
幼児後期	4～5歳	積極性	家族
児童期	5～12歳	勤勉性	地域、学校
青年期	13～19歳	同一性	仲間
初期成年期	20～39歳	親密性	友達、パートナー
成年期	40～64歳	生殖	家族、同僚
成熟期	65歳～	自己統合	人類

しかし、私は、それが全てではないと考える。例えば、小学生までは人を信頼し、人と話すことが好きな子供でも、中学校の環境が悪かったために人を信頼することができなくなり、初対面の人と話をすることが苦手になったという話を聞いた。反対に、大学に入ってからサークル活動を通して、積極的になったという話を聞いた。このことから、確かに、個人の成長には、家庭環境など、幼少期の影響が大きいですが、それ以外にも成長過程の出会いと経験は影響を与えられと考える。

第2章 選択的な居場所の必要性について

第1節 幼少期の仲間集団と親の持つネットワークの必要性

私は、家庭・幼稚園・保育園という子どもにとって選択できない場所だけでなく、地域の子ども同士の仲間集団など、選択的な居場所があることで、子どもは「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境による経験や、家庭・幼稚園・保育園ではできない経験ができ、成長することができると思う。

第1項 先行研究と考察

子どもの発達について、先行研究では、松田（2010）が、両親が友人や近所の人などの非親族ネットワークを持っていたことで、幼少期（4～6歳）にそれらの人と関わり

を持っていた子どもほど幼少期の自己主張力が高いことを示していた。また、両親が親族ネットワークを持っており、幼少期に親族と関わりを持っていた子どもほど幼少期の自己抑制能力が高いことを示していた。そして、両親の非親族と親族、どちらも適度に関わっていた子どもほど幼少期の向社会行動が多くなることを示していた。

松田（2010）によれば、これは、非親族と子どもとの関係では、非親族は自ら子どもの望むことをしてくれるわけではないために子どもは自己主張をしなければならず、親族と子どもとの関係では、親族は自ら子どもの望むことをしてくれるが、躊躇なく子どもに怒ることができるために自己制御をするためだと考えられる。

このことから、幼少期に親の持つネットワークにより与えられた機会の違いで、性格が変わる可能性があることが分かる。

また、住田・高島（2010）は、子どもにとって「他人の存在」を経験することがコミュニケーション能力、自己主張能力、自己抑制能力を形成するうえで重要だが、子どもが幼稚園・保育園・学校のみで「他人の存在」を形成するだけでは、幼稚園・保育園・学校は周囲に合わせなければ排除される恐れのある環境であるために不適合になる子どもがいることを指摘し、子どもが自由である中で発達できる、近所の子ども同士などで形成される学校以外の仲間集団の必要性を提唱していた。

このことから、学校以外の仲間集団には、子どもを成長させる効果や、集団への不適合による悪影響を防ぐ効果があると考えられる。

私はこれらの先行研究から、子どもには、子ども同士の仲間集団や親の持つネットワークによる関係があった方が良いのではないかということをもより詳しく検証したいと考えた。

松田（2010）では、親の持つ親族・非親族ネットワークが幼少期（4～6歳）の時点での子どもにどう影響しているかについて検証していたが、私はその後の小学校生活にどのような影響を与えるかを知りたいと考えた。また、住田・高島（2010）の提唱した子ども同士の仲間集団の効果は実際にあるのか小学校生活を見ることで知りたいと考えた。

第2項 仮説

松田（2010）は、非親族ネットワークにより、幼少期（4～6歳）の自己主張能力が向上するとしていた。また、親族ネットワークにより幼少期の自己主張能力が向上するとしていた。私はこれらの影響は小学校時点でもあると考える。

また、私は自己主張能力・自己抑制能力だけでなく、非親族・親族どちらでも、年齢の異なる人と関わる機会を与えるため、コミュニケーション能力が成長すると考える。また親の友人や親族がいることで子どもが認めてもらえる機会が増え、自己肯定感も向上すると考える。

また住田・高島（2010）の言うように、幼稚園・保育園・学校のような周囲に合わせることを求められる集団で不適合となってしまうと、コミュニケーション能力・自己主張能力・自己抑制能力・自己肯定感がうまく成長しない場合があるため、自由な仲間集団があった方が、これらの能力がうまく成長するのではないかと考える。

仮説1

幼児期に親のもつネットワークや子供同士の仲間集団を持っていることで、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境による経験や、家庭・幼稚園・保育園ではできない経験ができ、以下の能力が向上するのではないか。

- ①コミュニケーション能力
- ②自己主張能力
- ③自己抑制能力
- ④自己肯定感

第2節 小学校～高校での問題と家庭と学校以外の居場所の必要性

家庭と学校以外の居場所を持つことで橋渡しの関係を作ることになり、学校のクラス内の固定されたグループやスクールカーストの問題の逃げ道となり、学校の問題による性格への悪影響を防ぐことができるのではないかと考えた。

選択的で「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」家庭と学校以外の居場所の環境の中で、固定されたグループやスクールカーストがある学校の環境の中ではできない経験ができ、性格に良い影響があるのではないかと考えた。

また、家庭と学校以外の居場所の性格によっては、自分を認めてもらえる機会や、チームワークを大切にする機会や、初対面の人と関わる機会があるなどの経験ができ、性格に良い影響があるのではないかと考えた（第2章・第4節）。

第1項 先行研究と考察

現在、子供の多くが友人と出会う機会は学校に限られている。

しかし、小学校～高校には固定されたクラスがあり、そのクラスの状況によっては、

コミュニケーション能力（①）、自己主張能力（②）、自己肯定感（④）、向社会性（⑤）、他者への非排除性（⑥）、他者への信頼感（⑦）、他者への依存（⑧）に悪影響が出る可能性がある。学校のクラスには、固定されたグループやスクールカーストによる問題があるためだ。

先行研究においては、須藤（2012）、岩宮（2012）の調査において、固定された

グループの問題点として、他のグループに対して排他的であることや、グループの人は居心地が良いから一緒にいるというよりも、一人になりたくないために一緒にいるイツメンである場合があり、自分が排除されるという不信もあること、グループが排他的であるため、グループに依存するしかないことが挙げられていた。

また、スクールカーストの問題点として、鈴木（2012）の行った調査では、スクールカーストの下になってしまった人は、自己肯定感が低くなってしまうこと、意見を聞いてもらえないために自己主張をしなくなってしまうこと、人と会話することに苦手意識を感じてしまうことなどが挙げられていた。

私はここから、学校のクラス的环境によっては、コミュニケーション能力（①）、自己主張能力（②）、自己肯定感（④）、向社会性（⑤）、他者への非排除性（⑥）、他者への信頼感（⑦）、他者への依存（⑧）に悪影響が出る可能性があると考えた。

しかし、スクールカーストがあると自己肯定感が低くなってしまうこと以外は、少数のインタビューの結果をもとに考察されたものが多く、大量のデータをもとに分析されたものではないことから、私はまず、学校の環境による悪影響は実際にあるのかアンケート調査の分析を通して検証したい。

そして、先行研究では、子供の成長のために、学校以外に居場所があることや、幅広い人間関係を作ることはよいのではないかと指摘されているが、どのように良いのか検証したものは見つからなかったため、私は家庭と学校以外の居場所には、学校のクラス的环境によるコミュニケーション能力（①）、自己主張能力（②）、自己肯定感（④）、向社会性（⑤）、他者への非排除性（⑥）、他者への信頼感（⑦）、他者への依存（⑧）への悪影響を防ぐ効果や、これらを良い方向に導く効果があるのではないという仮説を立て、検証したい。

第2項 固定されたグループによる悪影響

【1】固定されたグループとは

固定されたグループは、小学校～高校のクラスの中で、数人で形成され、いつも話すメンバーであったり、移動などの際に一緒に行動したり、自由に班を決める際などに集まる。

佐藤（1995）の行った研究では、高校生女子では、3人以上からなるグループが中心であり、高校生女子の9割以上の者がグループに属していることが分かった。

また、グループに入る理由として、積極的な理由も消極的な理由もあることが分かった。積極的な理由として、「複数の友人に支えられているから」などが挙げられたが、消極的な理由として、グループに入っていないと「浮いた存在になる」「いじめの対象になるかもしれない」など、不便が生じるために、グループに入ることに悪い面があったとしても、防衛的な目的のために入らざるを得ない様子もみられていた。

【2】固定されたグループの良い点、悪い点

須藤（2014）の行った研究では、前青年期以降の友人関係において、良かったこと、難しかったことを自由記述形式で尋ねた結果、良かったこととして「性格の前向きな変化」「かけがえない友情」「心の支え」「見返りのない友情」が挙げられた一方で、難しかったこととして「グループによる束縛」「グループ内部での上下関係やいじめ」「キャラを演じる」などがあげられ、グループ形成によりかけがえのない友情が生まれる可能性がある一方で、自己防衛的にグループに属し、関係を維持するために過度に他人に合わせるなどの気遣いや気苦労、窮屈さがみられることが分かった。

岩宮（2012）は、グループの友人は本当の意味での「友だち」ではなく「イツメン」に過ぎず、「ぼっち」にならないためのものであるという状況に慢性的に疲れている子供が増加していると指摘している。

餅川（2011）によれば、クラス内に形成されるグループは、特に女子では「閉じた状態」で排他性を持っているのが特徴だ。それぞれに「明るい系」「オタク系」など目に見えないラベルが張られ、グループに所属する生徒は、自分と価値観、外見の近い者たちだけと関わることが多い。

これらのことから、グループ内の上下関係や排除への恐れにより、自己主張能力（②）が低くなってしまう可能性や、グループ以外の人と関わる機会の減少により、自分と価値観などが異なる人と壁ができてしまうなど、他者への排除性（⑥）が強まってしまう可能性がある。また、グループの人のみに依存してしまい、他者への依存（⑧）強くなってしまう可能性がある。

また、「イツメン」＝「友だち」ではなく、自分が本当に受け入れられているか分からないという不安から、他者への信頼感（⑦）が薄れてしまう可能性がある。

第3項 スクールカーストによる悪影響

【1】スクールカーストとは

森口（2007）は、スクールカーストを、「スクールカーストとは、クラス内のステイタスを表す言葉として、近年若者たちの間で定着している言葉です。従来と異なるのは、ステイタスの決定要因が、人気やモテるか否かという点であるということです。上位から『一軍・二軍・三軍』『A・B・C』などと呼ばれます」としている。

【2】スクールカーストの問題点

スクールカーストの大きな問題点は、上の地位にいる生徒と、下の地位にいる生徒に与えられた権利の数が違うことが、暗黙の了解として生徒の間にあることであると考えられる。

鈴木（2012）の行ったインタビュー調査では、上位の生徒は、クラスの全体で物事を

決めるとき、意見が通りやすかったり、騒いだり、楽しんだりする権利があったり、授業中に先生に話しかけたりする権利があるが、下位の者は、それらの権利はないことが暗黙の了解としてあるという。

また、神奈川県の中学生を対象にしたアンケートでは、上位になるほど「意見を押し通す」ことができることが分かっているが、このことについて鈴木は、コミュニケーション能力があることで スクールカーストの上位に行けるというわけではなく、上位に行けたことにより与えられたさまざまな権利により、「自分の意見を押し通す」ことができるようになった結果、コミュニケーション能力が高く「見える」可能性をしめしている。逆に、鈴木が行ったインタビュー調査によれば、下位の生徒は、上位の生徒に目をつけられ、さらに評価を下げられたり、いじめの対象にされたりすることを恐れるために、「地位に見合った行動をとる」ように振る舞っていることから、萎縮してしまったり、集団では、自分の意見が通らないから自然と意見を言うことがなくなることにより、「コミュニケーション能力が低く見える」というように、スクールカーストの地位がコミュニケーション能力 (①) や自己主張能力 (②) に影響を与える可能性があることを示している。

また、小原・平山 (2018) によれば、スクールカーストは、もともとの性質が、劣等感を感じやすくも、感じにくくもない普通の生徒にも、劣等感を感じさせるようにすることが分かった。このことから、スクールカーストが、自己肯定感 (④) に悪影響を与えていることが分かる。

また、鈴木 (2012) によると、学校のクラスで、上位になる層は、「共感性＝思いやり」が低く、「真面目でない」ことが多い。そのため、クラスには、進んでいいことをするとばかにされることがある可能性がある。また、スクールカーストの下位であるなどして、不当な扱いを受けることで、向社会性 (⑤) が減少してしまう可能性がある。

第5項 仮説2

学校以外の居場所があることは、小学校～高校のクラスのスクールカーストや固定されたグループなどの問題の逃げ道となり、以下の性格への悪影響を防ぐのではないか。また、スクールカーストや固定されたグループがある環境ではできない経験や、居場所の性格による経験ができることで、以下の性格に良い影響があるのではないか。

- ①コミュニケーション能力
- ②自己主張能力
- ③自己肯定感
- ⑤向社会性
- ⑥他者への非排除
- ⑦他者への信頼感
- ⑧他者への依存

第3節 大学の可能性と大学での学科以外の居場所の必要性

大学は、規模が大きく、固定されたクラスがないために、結束型の関係もありつつ、橋渡しの人間関係が生まれやすい環境である。また、学科以外にサークルなどの課外活動を行うことで、学科と課外活動の集団をつなぐ、橋渡しの関係を持つことができる。そのため、大学では、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境が作られると言える。サークル活動やボランティア活動などの性格によっては、そこでチームワークを大切にする機会や、初対面の人と関わる機会があるなどの経験ができる。

このような大学の環境や、学科以外の居場所の性格が、個人の性格に良い影響を与えると考える。

第1項 概要

大学では、高校までのように、1年間全員そろって同じ空間で同じ授業を受ける「固定されたクラス」は存在しない。自分でカリキュラムを立て、自分で先生の担当する授業に足を運ぶ。授業を受ける学生は、同じ学科・学年の学生だけではない場合もある。自分に固定されたグループの友人がいたとしても、教室内にいる他の学科の友人や、サークルなどが同じ友人とも関わりやすい。このことから、大学での人間関係は、付き合いたい人とだけ付き合える、そこにいる人と話すというように、高校までのクラスで縛られた関係からは離れ、一般的に楽だと言われる。大学は、結束型の関係もありつつ、橋渡しの人間関係が生まれやすい環境である。

大学のこのような人間関係の効果について、先行研究では、内田・遠藤・柴内（2012）が、大学とアルバイトの人間関係のあり方の違いによって、人間関係から感じる幸福感の違いが生まれると示した。付き合う人を選ぶことができる大学では、交友関係が広がることで、人間関係に対するポジティブな感じ方ができ、ストレスが少なくなり、心地よい関係が増加するが、付き合う人を選ぶことができないアルバイトでは、必ずしも心地よい関係が増加するわけではなく、逆にストレス源が増えてしまうという違いがみられた。高校までのクラスがある環境も、アルバイトと同様に、人間関係を選択することができない環境であるため、ストレスが大きくなると考えられる。

このように、大学の環境が、人間関係に対するポジティブな考え方につながることは分かっているが、それが個人の成長にもつながることを研究した先行研究は見つからなかった。私は大学の環境を高校までの環境と比較すると、大学の方がコミュニケーション能力(①)、自己主張能力(②)、自己肯定感(④)、向社会性(⑤)、他者への非排除性(⑥)、他者への信頼感(⑦)を高め、他者への依存(⑧)を低くする環境なのではないかという仮説を立て、検証したい。

固定されたクラスがなく、橋渡しの人間関係が生まれやすい大学の「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境によって、自らの立場を気にせずに意見が言えたり、気軽に人と関わることができたり、積極的になれたりすると考えられる。また、サークルなどの学科以外の居場所に所属することによっても、学科と課外活動の集団をつなぐ橋渡しの関係を持つことや、居場所の性格による経験ができる。その結果、コミュニケーション能力(①)、自己主張能力(②)、自己肯定感(④)、向社会性(⑤)、他者への非排除性(⑥)、他者への信頼感(⑦)を高め、他者への依存(⑧)を低くすることができるのではないか。

第2項 仮説3

大学は、高校までよりも「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境であると言える。また、大学で学科以外の居場所を持つことにより、学科と課外活動の集団をつなぐ、橋渡しの関係を持つことや、居場所の性格による経験ができる。その結果、以下の性格に良い影響があるのではないか。

- ①コミュニケーション能力
- ②自己主張能力
- ④自己肯定感
- ⑤向社会性
- ⑥他者への非排除性
- ⑦他者への信頼感
- ⑧他者への依存

第4節 仮説

第1項 仮説1～3のまとめ

仮説1… 幼児期に親のもつネットワークや子供同士の仲間集団を持っていることで、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境による経験や、家庭・幼稚園・保育園ではできない経験ができ、コミュニケーション能力(①)、自己主張能力(②)、自己抑制能力(③)、自己肯定感(④)が向上するのではないか。

仮説2… 家庭と学校以外の居場所があることは、小学校～高校のクラスのスクールカーストや固定されたグループなどの問題の逃げ道となり、次の性格への悪影響を防ぐのではないかと。また、スクールカーストや固定されたグループがある環境ではできない経験や、居場所の性格による経験ができることで、次の性格に良い影響があるのではないかと。

コミュニケーション能力(①)、自己主張能力(②)、自己肯定感(④)、向社会性(⑤)、他者への非排除性(⑥)、他者への信頼感(⑦)、他者への依存(⑧)

仮説3… 大学は、高校までよりも「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境であると言える。また、大学で学科以外の居場所を持つことにより、学科と課外活動の集団をつなぐ、橋渡しの関係を持つことや、居場所の性格による経験ができる。その結果、次の性格に良い影響があるのではないか。
コミュニケーション能力 (①)、自己主張能力 (②)、自己肯定感 (④)、向社会性 (⑤)、他者への非排除性 (⑥)、他者への信頼感 (⑦)、他者への依存 (⑧)

第2項 居場所でのどのような経験に効果があると考えるか

第1章で、居場所の存在と居場所の性格により、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境ができることや、居場所ならではの経験ができることに効果があると考えた。

「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境により、積極的に人と話しやすい、いきいきしやすく、学校のグループにいないような人とも関わりやすくなると考えられる。それに加え、居場所の性格によっても、例えば、チームが決められたり、大人が介入する居場所であるために、自然と人と関わりやすい環境ができるなど、積極的に人と話しやすい、いきいきしやすく、学校のグループにいないような人とも関わりやすい環境が作られることがある。チームワークを大切にされる居場所であるために、人と協力する経験ができることがある。このように、それぞれの居場所の性格によって、様々な経験ができると考えられる。

そこで、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境や居場所の性格によるどのような経験に、仮説のような効果があるかを考えた。

コミュニケーション能力の向上

「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境で、周囲を気にしすぎなくなることや、少人数でアットホームなど、人に話しかけやすい雰囲気があるなどの居場所の性格から、自分から積極的に人と関わることや学校のグループにいないような人と話す機会ができることや、学校よりもいきいきとすることができれば、自然と人と話すスキルが身に着いたり、話せるタイプの人が増えたりすると考えられる。また、チームが決められたり、出会いが多いような居場所の性格によって、初対面の人と関わる人が多いことによっても、自然と人と話すスキルが身につくと考えられる。

自己主張能力の向上

「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境で、周囲を気にしすぎなくなることや、意見を受け入れてもらうことのできる居場所の性格により、学校よりもいきいきとすることができれば、自己主張ができるようになると考えた。また、学校以外に居場所が

あることで、人間関係は学校だけではないと思えることで、依存がなくなったり、過度に学校での人間関係がこじれることに恐怖することがなくなることにつながり、自分の意見を言えるようになることにつながると考えた。

自己肯定感の向上

「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境で、周囲を気にしすぎなくなることや、少人数でアットホームなど、人に話しかけやすい雰囲気があるなどの居場所の性格から、学校よりもいきいきと明るくでき、学校では関わらないような人と関わることができれば、学校でスクールカーストがあることや、固定されたグループがあることによちできていた、自分は暗いというイメージや、自分はおとなしい人としか付き合うことができないというイメージがなくなり、自己肯定感が回復するのではないかと考えた。

また、自分を受け入れてくれる人がいる居場所で、認められたり、褒められたりする経験ができれば、自己肯定感が回復するのではないかと考えた。

向社会性の向上

チームワークを大切にしている経験ができれば、信頼関係を築くことにつながり、向社会性が向上するのではないかと考えた。

また、自分を受け入れてくれる人がいる居場所で、認められたり、褒められたりする経験ができれば、人が好きになることにつながり、向社会性が向上するのではないかと考えた。

他者への非排除性の向上

「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境で、周囲を気にしすぎなくなることや、少人数でアットホームなど、人に話しかけやすい雰囲気があったり、チームが決められるなどの居場所の性格から、学校のグループで関わったことのないような人と関わることができれば、学校に固定されたグループがあることでできるような、「明るいグループの人はみんな怖い」、「暗いグループの人と話しても楽しくない」などの固定観念が無くなり、苦手なタイプの人を作らなくなるのではないかと考えた。

他者への信頼感の向上

「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境で、周囲を気にしすぎなくなることや、少人数でアットホームなど、人に話しかけやすい雰囲気があるなどの居場所の性格から、学校よりもいきいきと明るくできることが自信につながり、人が自分を嫌いになるという不安が少なくなると考えられる。

また、自分を受け入れてくれる人がいる居場所で、認められたり、褒められたりする経験も、自信につながり、不安を少なくすると考えられる。

チームワークを大切にしている経験は、信頼関係を築くことにつながり、人が好きになり、他

者への信頼感が向上するのではないか。

他者への依存の減少

固定された関係から逃げることができない学校では、グループの人の顔色を伺わなければいけないこともあるが、嫌になったらすぐ辞めることができる「集団への依存が小さい」居場所があることで、周囲を気にしすぎるような依存が少なくなると考えた。また、学校以外の居場所があることで、人間関係は、学校の中だけでなく、居場所にもあると安心することができることも、狭い人間関係にこだわらないことにつながると考えた。

「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境や居場所の性格により、学校のグループにいないような人と関わることができることや、初対面の人と関わる機会が多い居場所があることにより、広い視点を持つことにつながると考えた。

また、自分を認められたり、褒められたりする経験ができれば、今仲の良い人だけでなく、他の人にも認めてもらえるという自信につながり、依存が減少すると考えた。

まとめ【居場所での経験と成長】 注) 居場所での経験の番号は、アンケートと対応

①初対面の人と出会う機会があった ④自分から積極的に人に話かけることができた ⑤学校のグループにいないような人と関わる ことができた ⑨学校よりも明るい、積極的、自信が持てる など生き生きした自分だった	コミュニケーション能力の向上
⑦人間関係は、学校の中だけでなく、居場所にもあると安心することがあった ⑨学校よりも明るい、積極的、自信が持てる など生き生きした自分だった	自己主張能力の向上
⑤学校のグループにいないような人と関わる ことができた ⑧仲間や大人から褒められたり、認められたり することがあった ⑨学校よりも明るい、積極的、自信が持てる など生き生きした自分だった	自己肯定感の向上
⑥チームワークを大切にする場所だった ⑧仲間や大人から褒められたり、認められたり することがあった	向社会性の向上

<p>⑤学校のグループにいないような人と関わることができた</p>	<p>他者への非排除性の向上</p>
<p>⑥チームワークを大切にす場所だった ⑧仲間や大人から褒められたり、認められたりすることがあった ⑨学校よりも明るい、積極的、自信が持てるなど生き生きした自分だった</p>	<p>他者への信頼感の向上</p>
<p>①初対面の人と関わることがあった ③もし嫌になったらすぐ辞めるか続けるかは自分の自由にできた ⑤学校のグループにいないような人と関わることができた ⑦人間関係は、学校の中だけでなく、居場所にもあると安心することがあった ⑧仲間や大人から褒められたり、認められたりすることがあった</p>	<p>他者への依存性の減少</p>

第3章 調査

第1節 調査方法

第2章・第4節の仮説を検証するため、幼児期の居場所の有無、小学校～高校までのクラス
の環境、小学校～高校の家庭と学校以外の居場所の有無と居場所での経験、大学での学科以
外の居場所の有無と居場所での経験、現在の①コミュニケーション能力、②自己主張能力、
③自己制御能力、④自己肯定感、⑤向社会性、⑥他者への非排除性、⑦他者への信頼感、⑧
他者への依存を尋ねる質問を含めたアンケート調査を行い、幼児期の居場所の有無・小学
校～高校までのクラスの環境と学校以外の居場所の有無・大学での学科以外の居場所の有無
が現在の①～⑧にどのような影響を及ぼしているのかを分析する。しかし、アンケートだけ
では分からない部分が多いと考えるため、高校までに家庭と学校以外に居場所があった人、
大学でサークル活動やボランティア活動を行っている人にインタビュー調査を行うことで
検証したい。

第1項 アンケート調査の目的

幼児期の居場所の有無・小学校～高校までのクラスの環境・小学校～高校までの家庭と学
校以外の居場所の有無と居場所での経験・大学での学科以外の居場所の有無と居場所での
経験が現在の①コミュニケーション能力、②自己主張能力、③自己制御能力、④自己肯定感、
⑤向社会性、⑥他者への非排除性、⑦他者への信頼感、⑧他者への依存に与える影響がある
かどうかについて、分析するため。

第2項 アンケート調査の方法

調査回答者は、宇都宮大学教育学部 教員養成課程1年生146名（全173名）、2年
生104名（全172名）、3年生8名（全156名）、総合人間形成課程3年生55名（全
60名）、4年生2名（全63名）の計315名であった。

第3項 アンケート対象者の性質とアンケート回答の使い方

アンケート対象者の性質として、教員養成課程の1年生は、クラスが決まっており、クラ
スごとに受ける必修授業が多く、クラスで行動する機会が多い。2年生からは、クラスより
小規模で人数が10～15名ほどの教科の専攻に分かれて、少人数で同じ授業を受けるこ
とが多いが、同時にクラスにも所属している。2年生は、1年生より、所属する集団の数が
多くなるが、少人数で固まって行動する機会が1年生より多くなり、どちらかといえば狭い
人間関係になると考えられる。総合人間形成課程は、全員が同じ空間にいる機会はほとん
どなく、個人が好んで授業を受けるために、自由な人間関係であると考えられる。

分析では、このような学科の環境の違いが影響すると考えられる大学の効果の検証（仮説
③）については、教員養成課程の1年生と2年生を比較することとした。その他の分析では、
学科や学年に関わらず、全員分のデータを使用した。（人数が少ないため、大学の効果の検
証には、総合人間形成の学生のデータは含めないこととした。）

第4項 アンケートの調査時期

2017年11月下旬～12月上旬

第5項 アンケートの調査内容

アンケート（質問紙）の内容は、この論文の最後に記載する。

第6項 インタビュー調査の目的

幼児期の居場所の有無・小学校～高校までのクラス的环境・小学校～高校までの家庭と学校以外の居場所の有無と居場所での経験・大学での学科以外の居場所の有無と居場所での経験が現在の①コミュニケーション能力、②自己主張能力、③自己制御能力、④自己肯定感、⑤向社会性、⑥他者への非排除性、⑦他者への信頼感、⑧他者への依存に与える影響があるかどうかについて、生の声を聴くことから考察するため。

第7項 インタビュー調査の方法

高校までに学校以外に居場所があった大学生と、大学で学科以外に居場所がある大学生に話を聞くことで、居場所のどのような環境と居場所でのどのような経験が人を成長させることにつながるのか考察する。

第8項 インタビュー調査の時期

2017年10月・12月

第9項 インタビュー調査の内容

インタビューでの質問内容は、**第3章・第3節**のインタビュー調査の欄に記載する。

第2節 アンケート調査の分析・考察

第2章・第4節で示した仮説①～③について、以下の順番で検証していきたい。

第1項 仮説1の検証…幼少期の仲間集団の効果について～小学校の学校生活との相関

第2項 仮説2 検証(1) …高校までのクラスの環境や個人の人気が学校生活に及ぼす影響について

第3項 仮説2の検証(2) …高校までの学校以外の居場所の有無や居場所での経験が現在の性格・考え方に与える影響について

第4項 仮説3の検証…大学生活が現在の性格・考え方に与える影響について

第1項 仮説1の検証…幼少期の仲間集団の効果について～小学校の学校生活との相関

【1】分析の方法

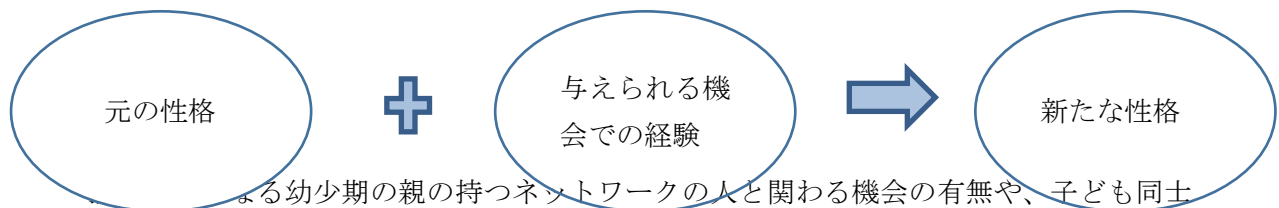
幼少期の子ども同士の仲間集団の有無と親の持つネットワークによる関係の有無は子どもの小学校時点での性格(①コミュニケーション能力、②自己主張能力、③自己抑制能力、④自己肯定感)に影響を与えるという仮説を立てたが、元の性格からくる子どもの小学校での子どもの人気も性格に影響を与えると考えられる。そのため、幼少期の親の持つネットワークの人と関わる機会の有無と子ども同士の仲間集団の有無が、小学校での人気による影響とは独立に影響を与えているかどうか分かるように、小学校での人気、幼少期の親の持つネットワークの人と関わる機会の有無、子ども同士の仲間集団の有無を独立変数とし、小学校時代の①コミュニケーション能力、②自己主張能力、③自己抑制能力、④自己肯定感を従属変数とした重回帰分析を行う。

ステップワイズ法で、5%有意を投入し、10%有意は除外した。(以下仮説で用いる重回帰分析は、同様の方法で行うものとする。)

【2】前提

前提として、幼少期に仲間集団があるかどうかは子ども自身の性格ではなく、親などに与えられる機会によるもので、その機会があることにより、性格に影響があると考えられる。

そのため、例えば、近所の子供と関わる機会が多い人ほどコミュニケーション能力が高いという結果となれば、それはコミュニケーション能力が高い元の性格のおかげで近所の子供と関わる機会が多くなったということではなく、近所の子供と関わる機会があったためにコミュニケーション能力が高まったと考える。



よる幼少期の親の持つネットワークの人と関わる機会の有無や、子ども同士の仲間集団の有無については、質問紙で、以下の質問をした。

(1) 「近所の子供と遊ぶ機会の有無」

(2) 「近所の子供の親や兄弟と関わる機会の有無」

(3) 「親の友人の子供と関わる機会の有無」

(4) 「親戚と集まる機会の有無」

このうち、(1) (2) は近所の仲間集団、(3) は非親族ネットワーク、(4) は親族ネットワークと関係している。

(1) 「近所の子供と遊ぶ機会の有無」と (2) 「近所の子供の親や兄弟と関わる機会の有無」は相関が強かったため (相関係数は 0.6)、1 つの変数としてまとめ、「近所の仲間集団の有無」という新しい変数を作った。(表1)

表1

		相関係数			
		幼稚園 子ども	幼稚園 親	幼稚園 親の友人	幼稚園 親戚
Kendall の tau	近所の子供と遊ぶ機会 相関係数	1.000	.600**	.181**	.095
	近所の子供の親や兄弟と関わる機会 相関係数	.600**	1.000	.204**	.041
	親の友人の子供と関わる機会 相関係数	.181**	.204**	1.000	.074
	親戚と集まる機会 相関係数	.095	.041	.074	1.000

**、相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

小学校時代の①コミュニケーション能力②自己主張能力③自己抑制能力④自己肯定感を測るものとして、質問紙で、コミュニケーション能力 (①) については小学校のクラスで「ア、人と話すことが苦手だったかどうか」と、「ウ、周囲になじめなかったかどうか」を尋ねた。自己主張能力 (②) については、小学校のクラスで「エ、自分の意見は言う方だったかどうか」を尋ねた。自己抑制能力 (③) については、小学校のクラスで「オ、よく先生に注意されていたかどうか」を尋ねた。自己肯定感 (④) については、小学校のクラスで「カ、自信がなくて落ち込むことがよくあったかどうか」を尋ねた。

【3】 結果

「ア、人と話すことは苦手だった」を従属変数とした重回帰分析の結果

「ア、人と話すことは苦手だった」を従属変数としたところ、小学校での人気、親の友人の子どもと関わる機会の有無、親戚と関わる機会の有無が残り、5%有意であった。標準化係数のベータは小学校での人気は-.368、親の友人の子どもと関わる機会の有無が-.128、親戚と関わる機会の有無が.109であった。調整済みR²乗の値は.165であった。この結果から、小学校で人気が高いほど、親の友人の子どもや親戚と関わる機会があるほど、人と話すことが苦手でなくなる（会話能力という意味でのコミュニケーション能力が高くなる）ことが分かった。

「ウ、周囲になじめなかった」を従属変数とした重回帰分析の結果

「ウ、周囲になじめなかった」を従属変数としたところ、小学校での人気、近所の仲間集団の有無が残り、1%有意であった。標準化係数のベータは、小学校での人気は-.304、近所の仲間集団の有無が-.176であった。調整済みR²乗の値は.151であった。この結果から、小学校での人気が高いほど、近所の仲間集団と関わる機会があるほど、周囲になじめようになる（社交性という意味でのコミュニケーション能力が高くなる）ことが分かった。

「エ、自分の意見は言う方だった」を従属変数とした重回帰分析の結果

「エ、自分の意見は言う方だった」を従属変数としたところ、小学校での人気のみが独立に影響を与えていることが分かり、5%有意であった。標準化係数のベータは.140であった。調整済みR²乗の値は.017であった。有意ではあるが、調整済みR²乗の値が非常に小さいため、小学校での人気と、自己主張能力は、あまり関係がないと考えられる。

「オ、よく先生に注意されていた」を従属変数とした重回帰分析の結果

オ、よく先生に注意されていたに影響を与えているものはなかった。

「カ、自信がなく落ち込むことがよくあった」を従属変数とした重回帰分析の結果

「カ、自信がなく落ち込むことがよくあった」を従属変数としたところ、小学校での人気のみが独立に影響を与えていることが分かり、1%有意であった。標準化係数のベータは-.317であった。調整済みR²乗の値は.097であった。この結果から、小学校での人気が高いほど、自信をなくすことがなくなる（自己肯定感が高くなる）ことが分かった。

【4】まとめと考察

非親族ネットワークの一つである親の友人の子供と関わる機会が多いことには、「会話

の能力がある」という意味でのコミュニケーション能力を高める影響があることが分かった。また、近所の仲間集団があることには、周囲になじむ「社交性」という意味でのコミュニケーション能力を高める影響があることが分かった。

しかし、親戚と関わる機会が多いことは、逆に「会話の能力がある」という意味でのコミュニケーション能力を低下させてしまう影響があることが分かった。

親の友人の子供と関わる機会が多いことで「会話の能力がある」という意味でのコミュニケーション能力を高める影響があるのは、親の友人の子どもと関わる機会が多い子どもは、友人と家族ぐるみで会う機会も多いために、子どもから見れば他人である大人とも話すことができるようになるためであると考えられる。また、友人である親同士が仲良く会話をする様子を子どもが見ることに効果があると考えられる。

近所の仲間集団があることに、周囲になじむ「社交性」という意味でのコミュニケーション能力を高める効果があるのは、近所の子どもたちとの遊びの中で、自分たちが決めたルールを守ったり、協力したりする中で、子どもに人と関わる能力が身に着くためであると考えられる。

自己肯定感に影響を与えていたのは、小学校での人気のみだった。幼少期に家族以外にも認められ、受け入れられることがあっても、小学校での自分の人気が低いと感じてしまえば、自信がなく落ち込むようになってしまうのだと考えられる。

小学校時代の自己抑制能力や、自己主張能力については、今回の調査では関連するものを見つけることができなかった。

ここまでで、子ども同士の仲間集団と親の持つネットワークによる関係が子どもの小学校時代に与える影響は、仮説と異なり、子ども同士の仲間集団と非親族のネットワークがコミュニケーション能力(①)に対してのみ良い影響を与えることが分かり、小学校時代の性格には、小学校での人気の方が与える影響が大きいことが分かった。しかし、親の持つネットワークや子ども同士の仲間集団があることが、小学校での人気を通して間接的に自己肯定感(④)に影響を与えることも考えられるため、「小学校での人気」を従属変数とし、親の持つネットワークや子ども同士の仲間集団を独立変数として重回帰分析を行った。(ケ)

「ケ、小学校のクラスでは人気がある方だった」を従属変数とした重回帰分析の結果

「ケ、小学校のクラスでは人気がある方だった」には、元の性格と、近所の仲間集団の有無と、親の友人の子どもと関わる機会の有無が残り、5%有意だった。標準化係数のベータは元の性格が-.368、近所の仲間集団の有無が.216、親の友人の子どもと関わる機会の有無が.107であった。調整済みR²乗の値は.237であった。

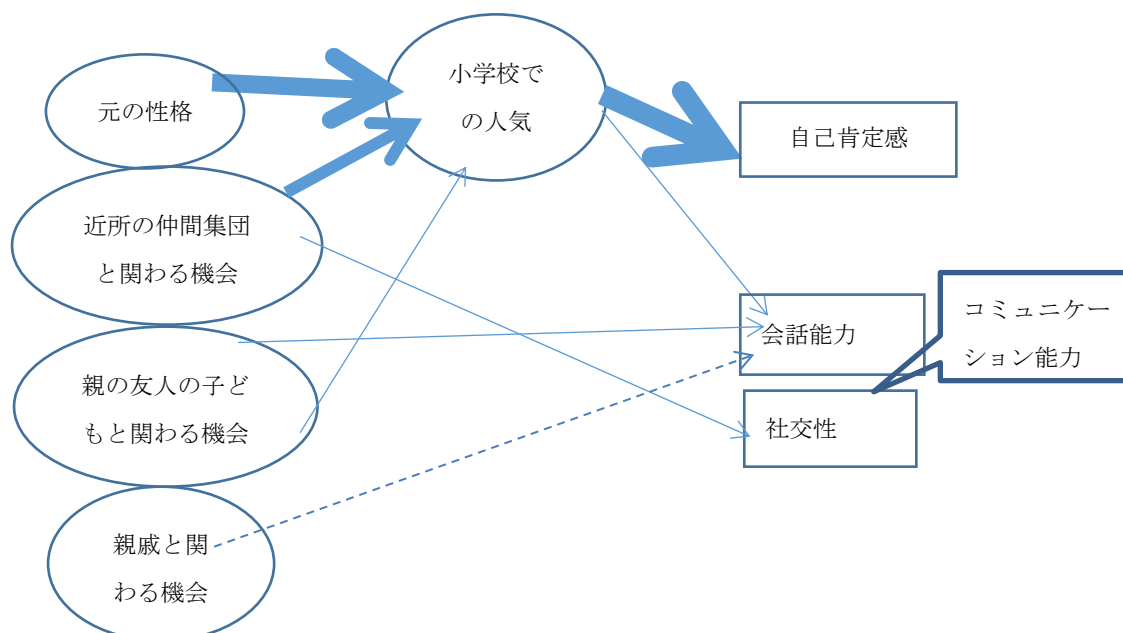
このことから、近所の仲間集団があることと、親の友人の子どもと関わる機会があることには、子どもの小学校での人気を高くする影響がある可能性があることが分かる。これは、仲間集団や親の子どもと関わる機会がある子どもの方が、遊び方などを分かっているためであると考えられる。

そして、小学校で人気が高い子どもほど自己肯定感があるため、近所の仲間集団があることと、親の友人の子どもと関わる機会があることが小学校での人気を通じて間接的に自己肯定感にも影響を与えている可能性があることが分かった。

これらのことから、近所の仲間集団と非親族のネットワークのみが、コミュニケーション能力の向上に対してのみ直接良い影響を与え、自己肯定感に、小学校の人気を通じて間接的に良い影響を与える可能性があることが分かり、仮説1で考えたものとは異なり、親族ネットワークの効果は見られず、自己主張能力、自己抑制能力に影響を与えていると思われるものはなかった。しかし、仮説1で考えた通り、家庭・幼稚園・保育園という子どもにとって選択できない場所だけでなく、地域の子ども同士の仲間集団や親の持つネットワークによる関係など、選択的な居場所があり、その中で、遊び方や、付き合い方を覚えたり、親の友人の子どもと関わったりするなどの経験することは、子どもの成長にとって良いと考えられる。

【5】 まとめ

機会があることが、能力を高くする影響があると考えられるものを実線で、低くする影響があると考えられるものを破線で表した。影響の強さを、線の太さで表した。



仮説1の検証の結果

親のネットワークと仲間集団があること⇒コミュニケーション能力 ○ (非親族と近所の

仲間集団のみ)

自己主張能力 ×
自己抑制能力 ×
自己肯定感 △

第2項 仮説2の検証(1)…クラス的环境や個人の人気が性格に及ぼす影響について

【1】 分析の方法

クラス的环境や個人の人気が性格や学校生活に及ぼす影響について、先行研究で小学校から高校までの間で最もスクールカーストの問題が起こりやすいとされた中学校時代を見ることから検証したい。

スクールカーストの有無・個人の人気・グループの人气が単独で個人の性格に与える影響を知るため、スクールカースト・個人の人気・グループの人气を独立変数とし、中学校時代の性格・学校生活を従属変数とした重回帰分析を行う。

【2】 前提

前提として、中学校のクラスで現れる性格は、元の性格によるものと、環境によって現れる性格の2つがあるものとする。例えば、スクールカーストが存在した人ほど、クラスの人と話をするのが苦手だったという結果が出れば、スクールカーストの有無は個人の元の性格に関わらず、環境で決まってしまうものなので、環境がクラスでの性格に影響を与えていると言える。しかし、個人の人気やグループの人气は元の性格によっても決まることが多いため、個人の人気やグループの人气が高い人ほどクラスの人と話をするのが得意だったという結果が出れば、もともと人と話をするのが得意な人が人気になるということと、人気があったために人と話をすることが得意でいられたことの2つの方向が考えられる。

スクールカーストの有無・個人の人気・グループの人气については、質問紙で以下のよう
に尋ねた。

(1) スクールカーストはあったか(1ははっきりとあった、2まあまああった、3全くなかった、の3段階で、スクールカーストがはっきりしているほど低い点数となっている)

(2) クラスでは人気があるほうだったか(1とてもそう思う、2まあまあそう思う、3あまりそう思わない、4全くそう思わない、の4段階で個人の人气が高かった人ほど低い点数となっている)

(3) 所属していたグループのクラス内の位置(発言力や存在感)はどうだったか(1どちらかといえば上の方、2中くらい、3どちらかといえば下の方の3段階で所属していた所属

していたグループの位置が高いほど低い点数となっている)

中学校時代の性格・学校生活においては、以下の質問をした。

ア、人と話すことが苦手だった (1 はい 2 いいえ)

イ、小さいことを気にしていた (1 はい 2 いいえ)

ウ、周囲になじめなかった (1 はい 2 いいえ)

エ、自分の意見は言う方だった (1 はい 2 いいえ)

カ、自信がなくて落ち込むことがよくあった (1 はい 2 いいえ)

キ、仲間外れをしたことがあった (1 はい 2 いいえ)

ク、いつも同じ人と話をしていた (1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう
思わない 4 全くそう思わない)

ケ、学校での人間関係が失敗しないよう強く心がけていた (1 とてもそう思う 2 まあまあ
そう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない)

アは会話能力という意味でのコミュニケーション能力 (①)、イは神経質がどうか、ウは
社交性という意味でのコミュニケーション能力 (①)、エは自己主張能力 (②)、カは自己肯
定感 (④)、キは他者への排除性 (⑥)、クは他者への依存性 (⑧)、ケは学校の人間関係へ
の過度な配慮を測るために設定した。

ア～ケのいずれも、当てはまるほど低い点数になっている。

【3】 結果

「ア、人と話すことは苦手だった」を従属変数とした重回帰分析の結果

「ア、人と話すことが苦手だった」を従属変数としたところ、個人の人気、所属していたグ
ループの位置づけが残り、1%有意であった。標準化係数のベータは個人の人気は $-.312$ 、ク
ループの位置づけが $-.232$ であった。調整済み R^2 乗の値は、 $.220$ であった。

この結果から、個人の人气が低いほど、また、所属していたグループの位置づけが低いほ
ど、人と話すことが苦手だった(会話能力という意味でのコミュニケーション能力が低かつ
た)ということが分かる。

「イ、小さいことを気にしていた」を従属変数とした重回帰分析の結果

「イ、小さいことを気にしていた」を従属変数としたところ、個人の人气のみが独立に影
響を与えており、1%有意であった。標準化係数のベータは $-.291$ であった。調整済み R^2 乗
の値は $.081$ であった。

この結果から、個人の人气が低いほど、小さいことを気にしていた(神経質であった)と
いうことが分かる。

「ウ、周囲になじめなかった」を従属変数とした重回帰分析の結果

「ウ、周囲になじめなかった」を従属変数としたところ、個人の人気のみが独立に影響を与えており、1%有意であった。標準化係数のベータは-.337であった。調整済み R2 乗の値は、.110であった。

この結果から、個人の人气が低かった人ほど周囲になじめなかった（社交性という意味でのコミュニケーション能力が低かった）ということが分かる。

「エ、自分の意見は言う方だった」を従属変数とした重回帰分析の結果

「エ、自分の意見は言う方だった」を従属変数としたところ、個人の人気のみが独立に影響を与えており、1%有意であった。標準化係数のベータは.319であった。調整済み R2 乗の値は.098であった。

この結果から、個人の人气が低かった人ほど、自分の意見を言う方ではなかった（自己主張能力が低かった）ことが分かる。

「カ、自信がなく落ち込むことがよくあった」を従属変数とした重回帰分析

「カ、自信がなく落ち込むことがよくあった」を従属変数としたところ、個人の人気のみが独立に影響を与えており、1%有意であった。標準化係数のベータは-.310であった。調整済み R2 乗の値は.093であった。

この結果から、個人の人气が低かった人ほど、自信がなく落ち込むことがよくあった（自己肯定感が低かった）ということが分かる。

「キ、仲間外れをしたことがあった」を従属変数とした重回帰分析

「キ、仲間外れをしたことがあった」を従属変数としたところ、所属していたグループの位置づけのみが独立に影響を与えており、5%有意であった。標準化係数のベータは.149であった。調整済み R2 乗の値は.019であった。

これは、有意であるが、調整済み R2 乗の値が非常に小さいため、所属していたグループの位置づけと、仲間外れをすること（排除性があること）にはあまり関連がないと言える。

「ク、いつも同じ人と話をしていた」を従属変数とした重回帰分析

「ク、いつも同じ人と話をしていた」を従属変数としたところ、個人の人気、スクールカーストの有無が残り、1%有意であった。標準化係数のベータは個人の人气が-.240、スクールカーストの有無が.180であった。調整済み R2 乗の値は.090であった。

この結果から、個人の人气が低いほど、また、スクールカーストがはっきりとあるほど、いつも同じ人と話をしていた（他者への依存性が高かった）ことが分かる。

「ケ、学校での人間関係が失敗しないよう強く心がけていた」を従属変数とした重回帰分析

「ケ、学校での人間関係が失敗しないよう強く心がけていた」を従属変数としたところ、スクールカーストの有無のみが独立に影響を与えており、1%有意であった。標準化係数のベータは.230であった。調整済みR²乗の値は.049であった。

この結果から、スクールカーストがはっきりあった人ほど、学校での人間関係が失敗しないよう、強く心がけていた（学校の人間関係に過度な配慮をしていた）ことが分かる。

【4】考察

1. 会話能力という意味でのコミュニケーション能力を従属変数としたところ、個人の人気とグループの人気のみが残り、コミュニケーション能力が低い人ほど、個人の人气が低いという結果になったが、これには、コミュニケーション能力が低い人は個人の人気や所属するグループの位置づけが低くなることと、個人の人気・所属するグループの位置づけが低い人ほどコミュニケーション能力が低くなることの両方向の影響があると考えられる。

コミュニケーション能力が低い性格であると、個人の人气が低くなることや、所属するグループが、クラスで位置の低いものになることにより、人气があり、クラスで力を持つグループの人よりもよくない扱いを受けることで、さらに人と話すことが苦手になると考えられる。

2. 自己主張能力、自己肯定感、神経質のどれを従属変数とした場合も、個人の人气のみが残り、個人の人气が低い人ほど、自己主張能力と自己肯定感が低く、神経質であることが分かったが、これには、自己主張能力と自己肯定感が低く、神経質な人ほどクラス内の人气が低くなることと、個人の人气が低いことで、自己主張能力と自己肯定感が低くなり、また、神経質になることの両方向の影響があると考えられる。

クラスでは、人気の低い者の意見は聞き入れてもらえなかったり、意見を言うことでさらに立場が悪くなるためにますます意見が言えなくなったりする可能性がある。また、人気がないと感じることで、ますます自己肯定感が低くなる可能性がある。また、人気のある人よりもいじめを受ける危険が高いことや、傷つくことを言われる危険が高いことで、ますます人の顔色を窺うように振る舞い、小さいことを気にするようになる可能性がある。

3. スクールカーストの有無は、話す人の固定と、学校での人間関係のこだわりに影響を与えることが分かった。このことから、スクールカーストがあること自体が、関わる人の固定や、学校での人間関係の失敗をしないように強くこだわることに影響を与えるということから、個人の性格とは関係なく、スクールカーストがあるという学校の環境が、窮屈さを感じさせていることが分かった。

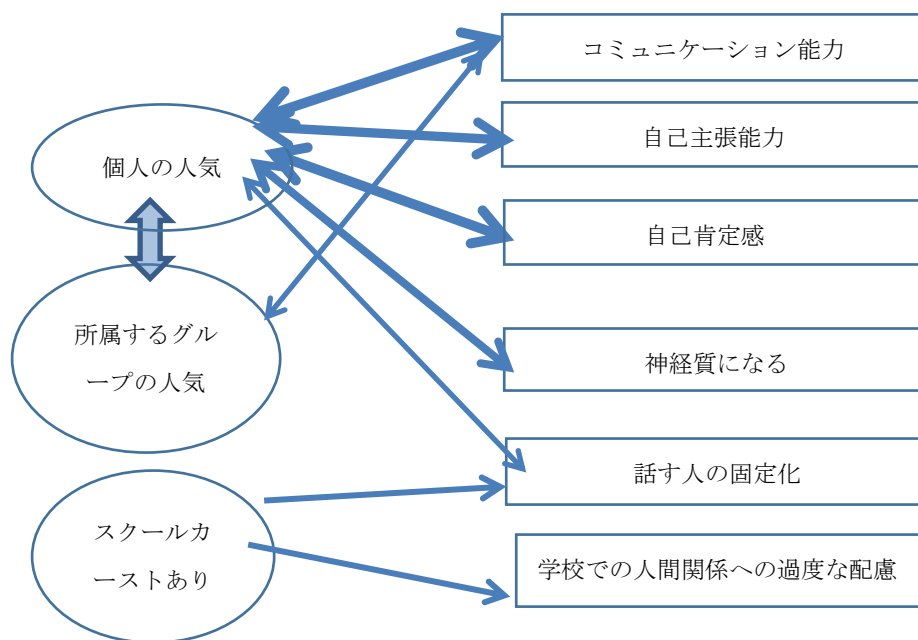
スクールカーストがあると、自分の位置が落とされないように、人間関係が失敗しないよう、一生懸命に気配りをしなければならないことや、自分より上の位置の人と話を嫌われることを恐れたり、自分より下の位置の人と話をしてばかにされることを恐れたりして、自分と同じ位置の人にしか話かけることができなくなることが考えられる。

学校の環境では、個人の性格によって、個人の人気や、所属するグループのクラス内の位置が決まるような序列がある。また、スクールカーストによって、話をする人が限られてしまい、他の価値観と触れることができなくなってしまう。このことから、仮説で考えた通り、学校の環境では、個人の性格が成長する機会が少なく、ますます悪い方向になってしまう可能性もあると考えられる。

これらのことから、仮説2で考えたように、学校のクラスの環境によって、コミュニケーション能力(①)、自己主張能力(②)、自己肯定感(④)、他者への依存(⑧)に悪影響がでる可能性があると言える。向社会性(⑤)、他者への排除性(⑥)、他者への信頼感(⑦)への影響については、この調査からは分からなかった。

【5】まとめ

注：個人の人気や所属するグループの人気については、人気が高いと、能力は高くなる影響があるような関係を実線で、人気が高いと、能力は低くなる影響があるような関係を破線で表した。影響の強さは、線の太さで表した。



第3項 仮説2の検証(2)…高校までの学校以外の居場所の有無や居場所での経験が現在の性格・考え方に与える影響について

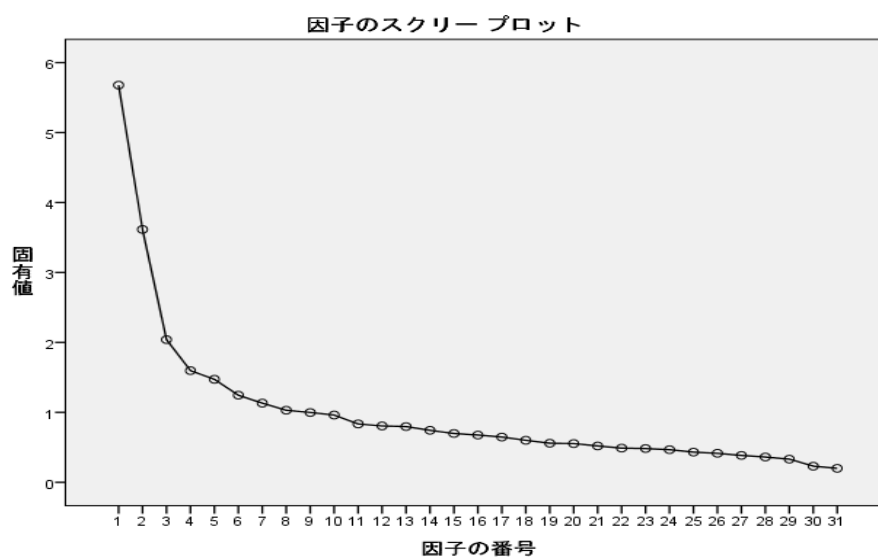
【1】 分析の方法

高校までの学校以外の居場所の有無や居場所での経験が現在の①コミュニケーション能力、②自己主張能力、④自己肯定感、⑤向社会性、⑥他者への非排除性、⑦他者への信頼感、⑧他者への依存に単独でどのように影響を与えているかを知るため、現在の性格への影響が強いと考えられる小学校から高校までの性格・学校生活の影響を除いてどれだけ居場所の有無や居場所での経験が①～⑧に影響を与えているかが分かる重回帰分析を行うこととした。

【2】 前提

まず、質問紙で①～⑧についてわかる質問を含めた現在の性格や考え方に関する質問を31項目設定したが、これらの相関関係を見てまとめるため、因子分析を行った。回転の方法はプロマックス回転を用いた。(表2)

表2 現在の性格に関する因子分析



因子行列^a

	因子		
	1	2	3
①初対面の人との会話は苦手でない	.644		-.255
⑥学科などは同じだが、関わりの無い人と一緒に活動に好意的である	.633	.119	-.268
③大学を卒業し、社会に出て人と会うことは楽しみだ	.575		-.105
②現在幸福である	.564		.101
⑳好奇心旺盛だ	.557	.201	

②自分の詳しくないジャンルの話にもついていくことができる	. 540		-. 163
②⑤物事の良い面をみるほうだ	. 536		
⑭自分とタイプの違う人にも壁を作らない	. 525	. 115	-. 190
⑯自分には優れた部分や人に好かれる部分がある	. 519		
⑰知らない人が困っていたら助ける	. 504		. 180
⑤あまり親しくなくともあいさつする	. 490	. 137	-. 282
④自分から人を遊びに誘う	. 469		-. 259
⑨他人と異なる意見でも言うことができる	. 439		. 120
⑪困っている友人を積極的に助ける	. 408		. 264
⑩間違っている友人を注意できる	. 397		. 186
②②出身地に愛着がある	. 383	. 145	. 253
②⑧真面目に努力する	. 337	. 141	. 303
⑦興味のない話でもだまってきく	. 330		
⑰友人の小さな態度の変化から、自分への感情が悪くなったと不安になる		. 741	-. 112
②④少しのことで深く悩む	-. 215	. 730	
⑱仲の良い友人でも、自分を嫌いになるのではと不安になる	-. 204	. 708	-. 106
③⑩周囲の評価を気にする		. 685	
②⑥落ち込みやすい	-. 272	. 673	
③①SNSをよくする		. 411	
⑱仲の良いグループの友人と仲たがいすると一人になると思う	-. 237	. 381	
⑮仲間外れにされてもしかたのない人がいると思う			
②⑦約束は守る	. 369	. 228	. 440
⑧自分で悪いと思ったことはしない	. 212	. 143	. 377
②⑩多くの友人より少ない友人を大切にする	-. 210	. 106	. 373
②③一人でも平気だ	. 180	-. 121	. 311
⑬仲の良い友人が誰かを無視しようと言ったら従う		. 110	-. 155

因子抽出法：主因子法

a. 3 個の因子が抽出されました。5 回の反復が必要です。

これを見ると因子 1 は、仮説で定義した①コミュニケーション能力 (①～⑥) ②自己主張能力 (⑨、⑩) ④自己肯定感 (⑬) の⑤向社会性 (⑪、⑫) ⑥他者への非排他性 (⑭) 相関があるグループとなっており、①コミュニケーション能力、②自己主張能力、④自己肯定感、⑤向社会性、⑥他者への非排他性、には互いに相関関係があることが分かる。

因子 1 は①コミュニケーション能力、②自己主張能力、④自己肯定感、⑤向社会性、⑥他者への非排他性が高いほど、点数が低くなる因子である。

因子 2 は、⑦他者への信頼性 (⑬、⑭)、⑧他者への依存性 (⑮) の相関があるグループとなっており、他者への信頼感と他者への依存は相関関係があることが分かった。

因子 2 は⑦他者への信頼性が高く、⑧他者への依存性が低いほど、点数が低くなる因子である。

因子 3 については、因子 1 と強い相関関係があったため、今回は因子 1、因子 2 のみ見る。

ここから、因子 1 は、コミュニケーション能力 (①)、自己主張能力 (②)、自己肯定感 (④)、向社会性 (⑤) 他者への非排他性 (⑥) が高いことを、積極性が高いと考える「積極性の因子」と名付ける。(積極性が高いほど、点数は低くなる)

因子 2 は、他者への信頼性 (⑦) が高く、他者への依存性 (⑧) が低いほど、他者への信頼性が高いと考える「信頼性の因子」と名付ける。(信頼性が高いほど、点数は低くなる)

以下、コミュニケーション能力 (①)、自己主張能力 (②)、自己肯定感 (④)、向社会性 (⑤) 他者への非排他性 (⑥) が高くなることを「積極性が高くなる」と表現する。

他者への信頼性が高く (⑦)、他者への依存性が低く (⑧) なることを「信頼性が高くなる」と表現する。

[3] 「積極性の因子」を従属変数とした重回帰分析

まず、小学校時代から高校時代までに学校以外に居場所があること自体は小学校時代から高校時代までの性格・学校生活の影響を除いても影響を与えているか検証する。(1)

次に学校以外の居場所での経験は小学校時代から高校時代までの性格・学校生活の影響を除いても影響を与えているか検証する。(2)

独立変数として小学校時代から高校時代までの性格・学校生活を用いるとしたが、小学校時代の性格・学校生活と中学校時代、高校時代の性格・学校生活にはそれぞれ相関関係があることが分かった。そのため、小学校から高校までの性格・学校生活に関する変数と、現在の「積極性の因子」との相関関係を見たところ、中学校時代の「人と話すことが苦手だった」

「自分の意見は言う方だった」「いつも同じ人と話をしていた」「クラスで人気がある方だった」が小学校から高校までの他の因子と比べて、現在に強く影響を与えていることがわかつ

た。(相関係数 1.9 以上を基準に比較的強い影響与えているとした)

また、中学校時代の「人と話すことが苦手だった」「自分の意見は言う方だった」「いつも同じ人と話をしていた」「クラスで人気がある方だった」同士は、互いに相関関係があることが分かった (表3)

表3

相関係数

			中 人と話す	中 意見	中 同じ人	中 人気
Kendallの τ_b	中学 人と話すことが苦手	相関係数	1.000	-.238**	.196**	-.407**
	中学 意見を言う方だった	相関係数	-.238**	1.000	-.176**	.304**
	中学 同じ人とばかり話しをしていた	相関係数	.196**	-.176**	1.000	-.227**
	中学 個人の人気	相関係数	-.407**	.304**	-.227**	1.000

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

このことから、小学校から高校までの学校生活を代表して中学校時代を見ることとし、中学校時代の性格・学校生活で、現在の積極性を高くする影響がある項目に当てはまるほど、点数が高くなる合成変数を作成した。

「中学校時代の性格・学校生活」=「人と話すことが苦手」-「自分の意見は言う方だった」+「いつも同じ人と話をしていた」-「クラスで人気がある方だった」

「人と話すことが苦手」「いつも同じ人と話をしていた」は現在の積極性を低くするという関係があるため足し算で、「自分の意見は言う方だった」「クラスで人気がある方だった」は現在の積極性を高くするため引き算で表している。

また、家庭と学校以外の居場所での経験については以下のような質問をし、家庭と学校以外に居場所がなかったという人には0と回答してもらうこととしていたが、居場所がなかった人は、居場所があっても経験がなかった人よりも積極性を高める効果はないと考えられるため、最も大きい数字を再割り当てし、新しく以下のような変数を作り、独立変数とした。

①初対面の人と出会う機会があった (1よくあった 2まあまああった 3あまりなかった 4全くなかった 5家庭と学校以外の居場所がなかった)

- ②嫌になったらやめることは自由にできた（1 はい 2 いいえ 3 家庭と学校以外の居場所がなかった）
- ③積極的に人に話かけることができた（1 あった 2 なかった 3 家庭と学校以外の居場所がなかった）
- ④学校のグループにいないような人と仲良くできた（1 あった 2 なかった 3 家庭と学校以外の居場所がなかった）
- ⑤チームワークを大切にする場所だった（1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない 5 家庭と学校以外の居場所がなかった）
- ⑥人間関係は学校だけでなく居場所にもあると安心できた（1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない 5 家庭と学校以外の居場所がなかった）
- ⑦仲間や大人から褒められたり、認められたりすることがあった（1 よくあった 2 まあまああった 3 あまりなかった 4 全くなかった 5 家庭と学校以外の居場所がなかった）
- ⑧学校よりも明るい、積極的、自信が持てるなど生き生きした自分だった。（1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない 5 家庭と学校以外の居場所がなかった）注：あまり変わらない人は3、学校の方がいきいきしていた人は4と回答
- ⑨役職につく経験や、リーダーシップをとる経験をした（1 あった 2 なかった 3 家庭と学校以外の居場所がなかった）
- 家庭と学校以外の居場所があった人ほど、そこでの良い効果があると思われる経験があった人ほど、低い点数になっている。

(1) 「中学校時代の性格・学校生活」と「小学校から高校までの居場所の有無」を独立変数として、「小学校から高校までの居場所の有無」が「中学校時代の性格・学校生活」の影響を除いても現在の積極性に影響を与えているかどうかを検証した結果(表4)

表4「中学時代の性格・学校生活」と「高校までの居場所の有無」を独立変数とした重回帰分析の結果

中学時代の性格・学校生活と高校時代に学校以外に居場所があったことが残り、1%有意であった。標準化係数のベータは、中学時代の性格・学校生活が-.392であり、高校時代の学校以外に居場所の有無が.140であった。モデル2の調整済みR2乗の値は.191であった。

係数^a

モデル	標準化されていない 係数	標準化係 数	t 値	有意確 率	共線性の統計量
-----	-----------------	-----------	-----	----------	---------

	B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
(定数)	-.114	.049		-2.304	.022		
1 中学時代の性格・学校生活	-.244	.030	-.421	-8.245	.000	1.000	1.000
(定数)	-.482	.144		-3.339	.001		
2 中学時代の性格・学校生活	-.228	.030	-.392	-7.593	.000	.958	1.044
高校時代の学校以外の居場所の有無	.262	.097	.140	2.711	.007	.958	1.044

a. 従属変数 REGR factor score 1 for analysis 2

この結果から、標準化係数のベータが中学校での性格・学校生活では-.346 高校時代に居場所があったかどうかでは.138 であるため、中学での性格・学校生活による影響と比較すると弱いものではあるが、中学校で「人と話すことが苦手だった」「自分の意見は言えない方だった」「いつも同じ人と話をしていた」「クラスで人気がない方だった」に当てはまることには、

「積極性」を低くする効果があるのに対し、高校時代に居場所があることは、このような中学校での性格・学校生活の影響を除いても、「積極性」を高くする効果があることが分かった。

次に、小学校時代の居場所の有無と、中学校時代の居場所の有無、高校時代の居場所の有無は互いに相関関係があったため、中学校時代の学校以外の居場所と小学校時代の学校以外の居場所の有無は現在の積極性に影響を与えているかを知るために、高校時代の居場所の有無、中学校時代の居場所の有無を順番に独立変数からはずして重回帰分析を行ったところ、中学校時代に学校以外に居場所があったことも、小学校時代に学校以外の居場所があったことも有意でないことが分かった。(表5)

表5 表4から高校の居場所を除いた場合の重回帰分析の結果

中学時代の性格・学校生活のみが独立に影響を与えており、1%有意であった。標準化係数のベータは-.421 であった。モデル1の調整済み R² 乗の値は.174 であった。

モデル	係数 ^a						
	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率	共線性の統計量	
	B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF

	(定数)	-.114	.049		-2.304	.022		
1	中学時代の性格・学校生活	-.244	.030	-.421	-8.245	.000	1.000	1.000

a. 従属変数 REGR factor score 1 for analysis 2

(2)「中学校時代の性格・学校生活」と「居場所での経験」を独立変数として、「居場所での経験」が「中学校時代の性格・学校生活」の影響を除いても現在の積極性に影響を与えているかどうかを検証した結果(表6)(表7)(表8)

表6 「中学校での性格・学校生活」と居場所での経験①～⑧全ての重回帰分析

まず、「中学校での性格・学校生活」と「居場所での経験」①～⑧をすべて独立変数としたところ、中学時代の性格・学校生活と高校までの居場所で積極的に人に話かけることができたかどうかのみが残り、1%有意であった。標準化係数のベータは中学時代の性格・学校生活が-.348であり、高校までの居場所で積極的に人に話かけることができたかどうかは.248であった。モデル2の調整済みR2乗の値は.228であった。

表6

モデル		係数 ^a				共線性の統計量		
		標準化されていない 係数		標準化係 数	t 値	有意確 率		
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	-.114	.049		-2.304	.022		

2	中学時代の性格・学校生活	-.244	.030	-.421	-8.245	.000	1.000	1.000
	(定数)	-.630	.117		-5.364	.000		
	中学時代の性格・学校生活	-.202	.030	-.348	-6.750	.000	.915	1.093
	高校までの居場所で積極的に人に話かけることができた	.321	.067	.248	4.810	.000	.915	1.093

a. 従属変数 REGR factor score 1 for analysis 2

標準化係数を見ると、中学校での性格・学校生活が-.348 であるのに対し、「居場所で人に積極的に話かけることができた」は.248 であることから、中学校での性格・学校生活の方が強く影響を及ぼしているが、中学校で「人と話すことが苦手だった」「自分の意見は言えない方だった」「いつも同じ人と話をしていた」「クラスで人気がない方だった」に当てはまることには、「積極性」を低くする効果があるのに対し、居場所で積極的に人に話かけることができた経験があることは、このような中学校での性格・学校生活の影響を除いても、「積極性」を高くする効果があることが分かった。

また、「居場所で積極的に人に話かけることができた」の標準化係数.248は(1)表4の「高校時代に居場所があった」の標準化係数.140 よりも高いため、単純に居場所があったことよりも、積極的に人に話しかけることができた経験があった方が、効果が高いと考えられる。

しかし、居場所での経験①～⑧には互いに相関関係があるために、「人に積極的に話しかけることができた」以外の性質の効果は見えてきていない可能性があるため、「人に積極的に話かけることができた」を独立変数から抜いて重回帰分析を行うこととした。(表7)

表7 表6から「居場所で積極的に人に話しかけることができた」を除いた場合の重回帰分析

中学時代の性格・学校生活と、高校までの居場所で学校のグループにいないタイプの人と仲良くなったかどうかが残り、1%有意であった。標準化係数のベータは、中学時代の性格・学校生活が-.392であり、高校までの居場所で学校のグループにいないタイプの人と仲良くなったかどうか.179であった。モデル2の調整済みR²乗の値は.203であった。このことから、居場所での経験の中で、「人に積極的に話しかけることができた」の次に影響を与えていると言えるのは、高校までの居場所で学校のグループにいないタイプの人と

仲良くなることができたかどうかであると分かる。

係数^a

モデル	標準化されていない 係数		標準化係 数	t 値	有意確 率	共線性の統計量		
	B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF	
1	(定数)	-.114	.049		-2.304	.022		
	中学時代の性格・学校生活	-.244	.030	-.421	-8.245	.000	1.000	1.000
2	(定数)	-.473	.113		-4.192	.000		
	高校までの居場所で学校のグループにいないタイプの人と仲良くなることができた	-.228	.030	-.392	-7.717	.000	.974	1.027

a. 従属変数 REGR factor score 1 for analysis 2

中学校での性格・学校生活の標準化係数が-.392 であるのに対し、「居場所で学校のグループにいないようなタイプの人と仲良くなることができた」の標準化係数は.179 であることから、中学校での性格・学校生活よりは影響が弱いですが、中学校で「人と話すことが苦手だった」「自分の意見は言えない方だった」「いつも同じ人と話をしていた」「クラスで人気がない方だった」に当てはまることには、「積極性」を低くする影響があるのに対し、居場所で学校のグループにいないような人と仲良くできたことは、中学校での性格・学校生活の影響を除いても、「積極性」を高める影響があることが分かった。

また「居場所で学校のグループにいないようなタイプの人と仲良くなることができた」の標準化係数.179 も、(1)表4の「高校時代に居場所があった」の標準化係数.140 よりも高いため、単純に居場所があることよりも、居場所で学校のグループにいないようなタイプの人と仲良くなることができた経験があった方が、効果が高いと考えられる。

また次に、「居場所で学校のグループにいないような人と仲良くなることができた」を独立変数から外して重回帰分析を行った。

表8 表7から「居場所で積極的に人に話しかけることができた」「居場所で学校のグループに居ないようなタイプの人と仲良くできた」を除いた場合の重回帰分析の結果

中学時代の性格・学校生活と高校までの居場所で仲間や大人に認められたかどうかがあり、1%有意であった。標準化係数のベータは中学時代の性格・学校生活が-.395であり、高校までの居場所で仲間や大人に認められたかどうかは.167であった。モデル2の調整済みR²乗の値は.199であった。

このことから、家庭と学校以外の居場所での経験の中で「居場所で積極的に人に話しかけることができた」、「居場所で学校のグループに居ないようなタイプの人と仲良くできた」の次に「居場所で仲間や大人に認められた」かどうかは現在の積極性に影響を与えていることが分かった。

係数^a

モデル	標準化されていない 係数		標準化係 数	t 値	有意確 率	共線性の統計量		
	B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF	
1	(定数)	-.114	.049		-2.304	.022		
	中学時代の性格・学校生活	-.244	.030	-.421	-8.245	.000	1.000	1.000
2	(定数)	-.361	.090		-4.035	.000		
	中学時代の性格・学校生活	-.230	.030	-.395	-7.777	.000	.977	1.023
	高校までの居場所で仲間や大人に認められた	.118	.036	.167	3.293	.001	.977	1.023

a. 従属変数 REGR factor score 1 for analysis 2

中学校での性格・学校生活の標準化係数が-.395 であるのに対し、「居場所で仲間や大人に認められた」の標準化係数は.167 であることから、中学校での性格・学校生活よりは影響が弱い、中学校で「人と話すことが苦手だった」「自分の意見は言えない方だった」「いつも同じ人と話をしていた」「クラスで人気がない方だった」に当てはまることには「積極性」を低くする影響があるのに対し居場所で仲間や大人に認められたことは、中学校での性格・学校生活の影響を除いても、「積極性」を高める影響があることが分かった。

また、「居場所で仲間や大人に認められた」の標準化係数.167 も(1)表4の「高校時代に居場所があった」の標準化係数.138 よりも高いため、単純に居場所があることよりも、居場所で仲間や大人に認められた経験があった方が、効果が高いと考えられる。

(3) 考察

高校時代に家庭と学校以外の居場所があったことは、中学校の性格・学校生活の影響を除いても現在の「積極性」を高くする影響を与えていることが分かった。中学時代以下の家庭と学校以外の居場所の効果は見られなかったが、これは、長く続けることに意味があったことや、高校時代の方が良い居場所と出会いやすかったことなどの理由が考えられる。

このことから、少なくとも、高校時代の家庭と学校外の居場所には、コミュニケーション能力 (①)、自己主張能力 (②)、自己肯定感 (④)、向社会性 (⑤)、他者への非排除性 (⑥) を高めるような効果や、中学校の性格・学校生活の影響によって、コミュニケーション能力 (①)、自己主張能力 (②)、自己肯定感 (④)、向社会性 (⑤)、他者への非排除性 (⑥) が低くなることを防ぐ効果があると言える。

周囲に合わせることが求められ、排除されないように振舞わなければならない学校では、自分の意見を言えなくなったり、積極的になれなかったりするため、性格に悪影響が出る場合がある。学校以外の居場所の存在によって、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境ができ、自分の意見が言いやすいというような学校ではできない経験ができて、性格に良い影響があることがある。または、学校の問題による悪影響を防ぐことがある。これは、仮説2を支持する結果となった。

ただ学校以外の居場所があることだけでなく、その居場所において、「仲間や大人に認められる」など特定の経験があった方が、良い影響が強くなることが分かった。

これは、居場所の存在だけでなく、居場所の性格によってもできる経験があり、その経験に効果があるためであると考えられる。

居場所での経験の中で、最も効果が強かったのは「居場所で積極的に人に話かけることができた」ことであった。これはもともと学校で積極的に人に話しかけることができた人が学校以外の居場所でもできただけであるとも考えられるが、クラスの人には積極的に話しかけることはできなかったが、学校以外の居場所の環境のおかげで、学校以外の居場所では人には積極的に話しかけることができたためにコミュニケーション能力が成長したとも考えられる。元々人見知りである人でも、自分の意志で辞めることができる場所で、嫌われることを恐れなければ積極的に話かけることができることがある。小規模な集団で、自然と話しやすい雰囲気を作られることがある。それが、良い影響を及ぼす可能性がある。

また、居場所での経験で次に影響が強かったのは「学校のグループにいないような人と仲良くできた」ことであった。学校では嫌われることを恐れて自分と似たタイプの人で形成される固定されたグループを作って、それ以外の人と関わりずらくなることがあるが、学校以外の居場所では、集団への依存が小さいことで人と気軽に関わりやすかったり、居場所の規模などによって、話しやすい雰囲気ができていたりする。そのため、学校以外の居場所では、学校のグループにいないような人とも関わるができるようになると考えられる。学校のグループにいないような人とも関わるができるようになると、視野が広がることで、壁を作らなくなり、会話のできるジャンルが広がるなどの成長の機会があると考えられる。

次に効果が強かったのは、「居場所で仲間や大人に認められた」ことであった。居場所で

仲間や大人から認められることは、自己肯定感を強くすることにつながり、自己肯定感を強くすることが、コミュニケーション能力や、自己主張能力を高めることにつながっていると考えられる。

このように、ただ居場所があることよりも、居場所での経験が強く影響を与えていることが分かった。しかし、実際にどのような経験に効果があったかどうかについては、経験として設定した①～⑧同士の相関関係があったためにこの調査から証明することはできなかったため、次節のインタビュー調査で考えたい。

【4】「信頼性の因子」を従属変数とした重回帰分析

【3】と同様に、小学校時代の性格・学校生活と中学校時代、高校時代の性格・学校生活はそれぞれ相関関係があるため、小学校から高校までの性格・学校生活に関する変数と、「信頼性の因子」との相関関係を見たところ、小、中、高での「小さいことを気にしていた」「自信がなく落ち込むことがよくあった」が他の因子と比較して強く相関が見られた（相関係数が2以上を基準とし手比較的強い相関があるとした）。

また、小、中、高のそれらは相関関係があった（表9）。そのため、小学校から高校までの学校生活を代表して小学校での性格・学校生活とし、現在の他者への信頼性を高くする要因に当てはまるほど高い点数となる合成変数を作成し、独立変数として用いた。

「小学校での性格・学校生活」＝「小さいことを気にしていた」＋「自信がなく落ち込むことがよくあった」

「小さいことを気にしていた」も「自信がなく落ち込むことがよくあった」も現在の他者への信頼性を低くするため、足し算で表した。

表9

相関係数

		小	小	中	中	高	高
		小さい	自信	小さい	自信	小さい	自信
Kendallの τ _b	小学 小さい ことを気にす る 相関係数	1.000	.420**	.508**	.262**	.312**	.176**
	小学 自信が ない 相関係数	.420**	1.000	.288**	.532**	.209**	.381**

中学 小さい ことを気にす る	相関係数	.508**	.288**	1.000	.515**	.621**	.369**
中学 自信が ない	相関係数	.262**	.532**	.515**	1.000	.402**	.587**
高校 小さい ことを気にす る	相関係数	.312**	.209**	.621**	.402**	1.000	.527**
高校 自信が ない	相関係数	.176**	.381**	.369**	.587**	.527**	1.000

**、相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

そして、「小学校での性格・学校生活」と小学校から高校までの居場所の有無を独立変数とした重回帰分析と、「小学校での性格・学校生活」と居場所での経験①～⑧を独立変数とした重回帰分析をそれぞれ行った。その結果、小学校から高校までの居場所の有無も居場所での経験①～⑧も現在の他者への信頼性には影響を与えておらず、小学校での性格・学校生活のみが影響を与えていることが分かった。(表10)

(1) 「信頼性の因子」を従属変数とした重回帰分析の結果

表10 「信頼性の因子」を従属変数とした重回帰分析(高校まで)の結果

小学校の性格・学校生活のみが独立に影響を与えており、1%有意であった。標準化係数のベータは.335であった。モデル1の調整済みR2乗の値は.109であった。

表10

モデル	係数 ^a						
	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率	共線性の統計量	
	B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
(定数)	-1.216	.199		-6.122	.000		
1 小学校の性格・学校生活	.378	.060	.335	6.319	.000	1.000	1.000

(2) 考察

この結果から、他者への信頼性が高く (⑦)、他者への依存が低い (⑧) ことを信頼性が高いと考える「信頼性」は元の性格や、家庭環境など、幼少期の影響が大きいと考えられ、高校までに居場所があったことは影響を与えていないということが分かった。仮説2の⑦⑧では、学校では固定されたグループの人としか仲良くできないことで数少ない友人にしか心を開けないように依存してしまうことや、グループの中でも本当に一緒にいることが楽しいからという意味の仲良しではなく一人になりたくないための「イツメン」である場合があるために人を信頼できなくなってしまうことがあるが、学校以外の居場所では過度に周りに合わせすぎずに人間関係を築くことができるために本当に仲のよい友人に出会うことができたり、いろいろなタイプの人と仲良くできたりするために人を信頼できるようになったり、依存しなくなったりするのではないかと考えていたが、これは否定された。

これには、高校までの学校以外の居場所に本当に仲のよい友人に出会うことができる性格や、いろいろなタイプの人と仲良くできる性格があっても人への信頼を高くし、依存を少なくする効果はないことと、高校までの学校以外の居場所に高校までの学校以外の居場所に本当に仲のよい友人に出会うことができる性格や、いろいろなタイプの人と仲良くできる性格がなかったことの2つが考えられる。

高校までの居場所には信頼性を高め、依存を少なくする性格がなかったのだとしても、大学での居場所には効果がある可能性もあるため、**第4項**で検証したい。

第4項 仮説③の検証…大学生生活が現在の性格・考え方に与える影響について

【1】分析の方法

第3項で行った重回帰分析に、大学生生活・大学における居場所での経験を加えて重回帰分析を行った。

大学生生活については、質問紙で以下を尋ね、独立変数とした。

「大学は高校までより人間関係が楽だと感じるか」

「高校までとは仲良くなれなかったタイプの人と仲良くなることができたか」。

大学における居場所での経験については高校までの居場所での経験と同様に、居場所がなかった人については最も大きい数字を割り当てた以下を独立変数とした。

①初対面の人と出会う機会があった (1よくあった 2まあまああった 3あまりなかった 4全くなかった 5居場所に所属していない)

- ②嫌になったらやめることは自由にできた（1 はい 2 いいえ 3 居場所に所属していない）
- ③積極的に人に話かけることができた（1 あった 2 なかった 3 居場所に所属していない）
- ④学科のグループにいないような人と仲良くできた（1 あった 2 なかった 3 居場所に所属していない）
- ⑤チームワークを大切にする場所だった（1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない 5 居場所に所属していない）
- ⑥人間関係は学科だけでなく居場所にもあると安心できた（1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない 5 居場所に所属していない）
- ⑦仲間や大人から褒められたり、認められたりすることがあった（1 よくあった 2 まあまああった 3 あまりなかった 4 全くなかった 5 居場所に所属していない）
- ⑧学科よりも明るい、積極的、自信が持てるなど生き生きした自分だった。（1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない 5 居場所に所属していない）注；あまり変わらない人は3、学校の方がいきいきしていた人は4
- ⑨役職につく経験や、リーダーシップをとる経験をした（1 あった 2 なかった 3 居場所に所属していない）

【2】前提

大学生生活の影響を考える際には、学年を考慮した。

対象者の教員養成課程の1年生は、クラスが決まっており、クラスごとに受ける必修授業が多く、クラスで行動する機会が多い。2年生からは、クラスより小規模で人数が10～15名ほどの教科の専攻に分かれて、少人数で同じ授業を受けることが多いが、クラスにも所属しており、クラスで受ける授業もある。2年生は、1年生より、所属する集団の数が多くなるが、少人数で固まって行動する機会が1年生より多くなり、どちらかといえば狭い人間関係になると考えられるというように学年によって環境が大きく変わることを考慮する。また、2年生は1年生より、影響が積み重なるため、相対的に大学の影響が強くなると考えられる。

【3】「積極性の因子」を従属変数とした重回帰分析

(1) 大学1年生の場合

表11 【大学1年生の場合】「積極性の因子」を従属変数とし、大学の居場所の効果を含めた重回帰分析

中学時代の性格・学校生活、大学の居場所で積極的に人に話しかけることができた、高校までの居場所で積極的に人に話しかけることができた、高校までの居場所を嫌になったら自由に辞めることができたのみが残り、5%有意であった。標準化係数のベータは、中学時代の性格・学校生活が-.370、大学の居場所で積極的に人に話しかけることができたが.204、高校までの居場所で積極的に人に話しかけることができたが.182であった。モデル1の調整済みR²乗の値は.329であった。

係数^{a, b}

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	-.192	.071		-2.709	.008
	中学時代の性格・学校生活	-.314	.045	-.500	-6.913	.000
2	(定数)	-.725	.157		-4.606	.000
	中学時代の性格・学校生活	-.259	.046	-.412	-5.629	.000
	大学の居場所で積極的に人に話しかけることができた	.365	.097	.275	3.752	.000
	(定数)	-.991	.194		-5.114	.000
3	中学時代の性格・学校生活	-.232	.047	-.370	-4.965	.000
	大学の居場所で積極的に人に話しかけることができた	.271	.104	.204	2.601	.010
	高校までの居場所で積極的に人に話しかけることができた	.260	.113	.182	2.292	.023

a. 従属変数 REGR factor score 1 for analysis 2

b. 学年 = 1.00 に対するケースだけを選択。

次に、高校までの居場所での経験同士、大学の居場所での経験同士には相関関係があるため、「高校までの居場所で積極的に話しかけることができた」「大学の居場所で積極的に人に話しかけることができた」を除いて重回帰分析を行った。(表12)

表12 【大学1年生の場合②】「高校までと大学の居場所で積極的に人に話しかけることができた」を除いた場合

中学時代の性格・学校生活と大学の居場所はチームワークを大切にする場所だったのみが残り、1%有意であった。標準化係数のベータは中学時代の性格・学校生活が-.423であり、大学の居場所はチームワークを大切にする場所だったが.242であった。モデル1の調整済みR²乗の値は.285であった。

係数^{a, b}

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	-.180	.070		-2.554	.012
	中学時代の性格・学校生活	-.306	.045	-.491	-6.784	.000
2	(定数)	-.524	.124		-4.221	.000
	中学時代の性格・学校生活	-.264	.045	-.423	-5.810	.000
	大学の居場所はチームワークを大切に する場所だった	.175	.053	.242	3.316	.001

a. 従属変数 REGR factor score 1 for analysis 2

b. 学年 = 1.00 に対するケースだけを選択。

さらに、「大学に居場所はチームワークを大切に
する場所だった」も除いて重回帰分析を行
った。(表13)

**表13 【大学1年生の場合③】「高校までと大学の居場所で積極的に人に話しかけることができ
た」「大学の居場所はチームワークを大切に
する場所だった」を除いた場合**

中学時代の性格・学校生活、大学の居場所で学科よりも積極的にいきいきしていたのみが
残り、1%有意であった。標準化係数のベータは中学時代の性格・学校生活が-.434、大学
の居場所で学科よりも積極的にいきいきしていたが.233であった。モデル2の調整済みR2
乗の値は.282であった。

表13

係数^{a, b}

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	-.180	.070		-2.554	.012
	中学時代の性格・学校生活	-.306	.045	-.491	-6.784	.000
2	(定数)	-.650	.161		-4.034	.000

中学時代の性格・学校生活	-.271	.045	-.434	-6.011	.000
大学の居場所で学科よりも積極的でいきいきしていた	.182	.057	.233	3.221	.002

a. 従属変数 REGR factor score 1 for analysis 2

b. 学年 = 1.00 に対するケースだけを選択。

(2) 分かったこと

大学1年生では、標準化係数のベータを見ると、中学時代の性格・学校生活では-.370、高校までの居場所で人に積極的に話しかけることができたでは.182であるのに対し、大学の居場所で人に積極的に話しかけることができたでは.204であるため（表11）、中学時代の影響の方が大きく残るが、高校までの居場所や、大学での学科居場所の影響も出ていることが分かる。中学校で「人と話すことが苦手だった」「自分の意見は言えない方だった」「いつも同じ人と話をしていた」「クラスで人気がない方だった」に当てはまることには、「積極性」を低くする影響があるのに対し、高校までの学校外の居場所や、大学の学科以外の居場所で人に積極的に話しかけることができたことや、大学の学科以外の居場所でチームワークが大切にされていたことや、学科よりもいきいきと積極的になれたことには、「積極性」を高める効果があることが分かる。

(3) 大学2年生の場合

表14 【大学2年生の場合】「積極性の因子」を従属変数とし、大学の居場所の効果を含めた重回帰分析

大学で学科以外に居場所があることで安心できた、中学時代の性格・学校生活、大学で高校までとは仲良くなれなかったタイプの人と仲良くなれた、大学の居場所で学科よりもいきいきとして積極的だったが残り、5%有意であった。標準化係数のベータは、大学で学科以外に居場所があることで安心できたが.440、中学時代の性格・学校生活が-.308、大学で高校までとは仲良くなれなかったタイプの人と仲良くなれたが.218であった。モデル3の調整済みR2乗の値は.353であった。

係数^{a, b}

モデル	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
(定数)	-.794	.162		-4.915	.000
1 大学で学科以外に居場所があることで安心できた	.458	.079	.494	5.773	.000
2 (定数)	-.857	.154		-5.551	.000

	大学で学科以外に居場所があることで安心できた	.445	.075	.481	5.907	.000
	中学時代の性格・学校生活 (定数)	-.163	.046	-.287	-3.524	.001
	大学で学科以外に居場所があることで安心できた	-1.283	.217		-5.903	.000
	大学で学科以外に居場所があることで安心できた	.408	.074	.440	5.483	.000
3	中学時代の性格・学校生活	-.175	.045	-.308	-3.878	.000
	大学で高校までとは仲良くなれなかったタイプの人と仲良くなれた	.227	.084	.218	2.706	.008

a. 従属変数 REGR factor score 1 for analysis 2

b. 学年 = 2.00 に対するケースだけを選択。

また、大学での居場所での経験同士には相関関係があるため、表16から「大学で学科以外に居場所があることで安心できた」を外して重回帰分析を行った。

表15【大学2年生の場合③】表14から「大学で学科以外に居場所があることで安心できた」を外して重回帰分析を行った結果

大学の居場所で仲間や大人に認められた、中学時代の性格・学校生活、大学で高校までとは仲良くなれなかったタイプの人と仲良くなれた、大学の居場所で積極的に人に話しかけることができたが残り、標準化係数のベータは、大学の居場所で仲間や大人に認められたが.212、中学時代の性格・学校生活が-.301、大学で高校までとは仲良くなれなかったタイプの人と仲良くなれたが.281、大学の居場所で積極的に人に話しかけることができたが.222であった。モデル4の調整済みR2乗の値は.303であった。

表15

係数^{a,b}

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
	(定数)	-.750	.199		-3.762	.000
1	大学の居場所で仲間や大人に認められた	.401	.094	.387	4.259	.000
2	(定数)	-.805	.191		-4.213	.000

	大学の居場所で仲間や大人に認められた	.385	.090	.371	4.272	.000
	中学時代の性格・学校生活(定数)	-.165	.049	-.290	-3.334	.001
	大学の居場所で仲間や大人に認められた	.350	.087	.338	4.007	.000
3	中学時代の性格・学校生活	-.179	.048	-.314	-3.735	.000
	大学で高校までとは仲良くなれなかったタイプの人と仲良くなれた	.266	.088	.255	3.021	.003
	(定数)	-1.610	.278		-5.786	.000
	大学の居場所で仲間や大人に認められた	.220	.104	.212	2.114	.037
	中学時代の性格・学校生活	-.171	.047	-.301	-3.648	.000
4	大学で高校までとは仲良くなれなかったタイプの人と仲良くなれた	.292	.087	.281	3.358	.001
	大学の居場所で積極的に人に話しかけることができた	.381	.171	.222	2.233	.028

a. 従属変数 REGR factor score 1 for analysis 2

b. 学年 = 2.00 に対するケースだけを選択。

(4) 分かったこと

大学2年生では、中学校で「人と話すことが苦手だった」「自分の意見は言えない方だった」「いつも同じ人と話をしていた」「クラスで人気がない方だった」に当てはまることには、「積極性」を低くする影響があるのに対し、大学の学科外の居場所での経験（大学で学科以外に居場所があることで学科以外にも人間関係はあると安心できた、大学の居場所で仲間や大人に認められた、大学の居場所で積極的に人に話しかけることができたなど）や、大学で高校までとは仲良くなれなかったタイプの人と仲良くなれたことには「積極性」を高める効果があることが分かった。

この調査からははっきりとは分からないが、大学で高校までには仲良くなれなかったタイプの人と仲良くなることができたことは、大学の人間関係が固定されたグループだけでなく、他の人とも関わりやすい環境であることが影響していると考えられ、大学の環境に効果がある可能性がある。

また、大学2年生のデータの標準化係数のベータを見ると、大学で学科以外に居場所があることで安心できたが.440であるのに対し、中学時代の性格・学校生活が-.308であるため

(表16)、1年生のデータでは、大学の居場所での経験の効果は、中学時代の影響を下回っていたのに対し、2年生では、中学時代の影響を上回る、大学の学科以外の居場所の効果があることが分かった。

(5)考察

大学1年生では、中学時代の影響の方が大きく残るが、高校までの居場所や、大学での学科居場所での経験の影響もあることが分かった。

高校までの家庭と学校以外の居場所で人に積極的に話かけることができたことや、大学の学科以外の居場所で、人に積極的に話かけることができたり、チームワークを大切にす経験をしたり、学科よりもいきいきと積極的になれたりしたことには、「積極性」を低くする中学時代の影響を除いても、「積極性」を高める効果があると分かった。このように、大学の学科以外の居場所での経験による効果はみられたが、大学の環境による効果はみられなかった。

大学2年生では、大学の学科外の居場所での経験(大学で学科以外に居場所があることで学科以外にも人間関係はあると安心できた、大学の居場所で仲間や大人に認められた、大学の居場所で積極的に人に話しかけることができたなど)に加え、大学で高校までとは仲良くなれなかったタイプの人と仲良くなれたことに「積極性」を高める効果があることが分かった。中学時代の影響も残るが、大学で学科以外の居場所があることで安心できたことには、中学時代の影響を上回る効果が見られた。

仮説3で考えた通り、大学のサークルなどの学科以外の居場所は、個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい環境であることが多い。その環境が、人に話しかけやすく、いきいきとできることにつながる。また、学科以外の居場所の性格によっても、人に話しかけやすくなったり、人と協力できたり、いきいきとできることがある。それが、「積極性」を高めることにつながっていると考えられる。これは、大学のサークルなど学科以外の居場所に、コミュニケーション能力(①)、自己主張能力(②)、自己肯定感(④)、向社会性(⑤)、他者への非排除性(⑥)を高める効果があると考えた仮説3の①～⑥を支持する結果となった。

大学2年生では、学科以外の居場所があることで安心できることに大きな効果がある理由としては、2年生は、1年生より、所属する集団が多くなるが、少人数で固まって行動する機会が多くなり、どちらかといえば狭い人間関係になると考えられるという、1年生と2年生の学科環境の違いが影響していると考えられる。2年生では、学科内の人間関係の難しさも出てきやすく、広い人間関係がある学科外の居場所の存在が大きくなると考えられる。これも、橋渡し関係を作ることの効果があると考えた、仮説3を支持する結果となった。

また、2年生では、1年生では見られなかった、大学で高校までとは仲良くなれなかった

タイプの人と仲良くなれたことの効果も見られた。2年生では、大学で過ごした期間が長くなることにより、影響が積み重なった結果であると考えられる。

大学で高校までとは仲良くなれなかったタイプの人と仲良くなれたことには、この調査からは分からないが、仮説3で考えたように、大学の「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境による影響もあると考えられるため、インタビューで調査したい。

高校までのように、クラスがあり、その中でスクールカーストがあると、嫌われることを恐れて、自分よりスクールカーストが上位の人とは深く関わることを避けてしまうことがある。それに対し、大学ではクラスがないためにそのようなことが起こりにくいことや、固定された友人だけでなく、他の人とも関係を築きやすいことがある。そして、自分が今まで仲良くしていたタイプの人とは異なる価値観も取り入れることができることにつながったために、コミュニケーション能力(①)、自己主張能力(②)、自己肯定感(④)、向社会性(⑤)、他者への非排除性(⑥)を高めることができたと考えられる。

【4】「信頼性の因子」を従属変数とした重回帰分析

(1)「信頼性の因子」を従属変数とした重回帰分析の結果

表16 「信頼性の因子」を従属変数とし、大学の居場所の効果を含めた重回帰分析

小学校の性格・学校生活のみが独立に影響を与えていることが分かり、標準化係数のベータは.435であった。

係数^a

モデル	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		

1	(定数)	-1.595	.295		-5.402	.000
	小学校の性格・学校生活	.506	.087	.435	5.812	.000

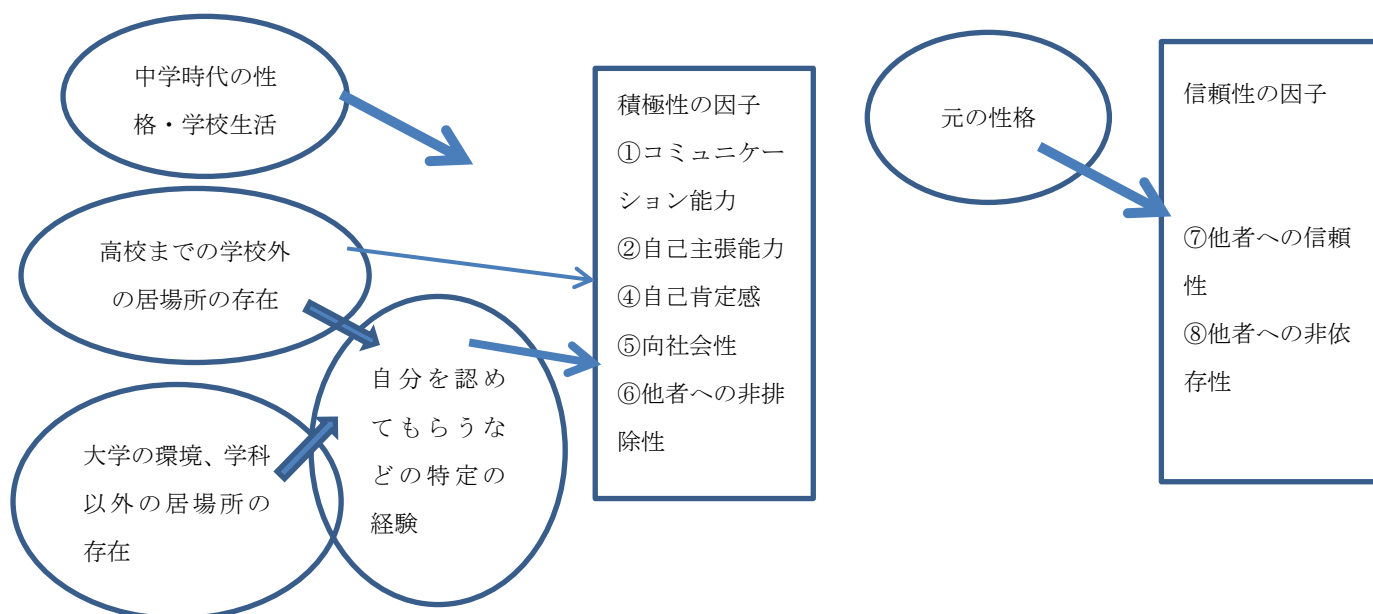
a. 従属変数 REGR factor score 2 for analysis 2

(2) 考察

第3項の高校までの分析とも合わせて考えると、高校までの居場所にも、大学の環境や学科以外の居場所にも信頼性を効果がないことが分かり、信頼性については、元の性格を変えることは難しいと考えられ、仮説2や3の⑦⑧の部分は否定された。

【5】第3項・第4項のまとめ

仮説2、3の①～⑥の部分については正しいと言えるが、⑦⑧は否定された。



第5項 アンケート調査全体のまとめ

仮説1

幼少期の仲間集団と親の持つ非親族ネットワークによる関係を持つことには、小学校時点での子どものコミュニケーション能力を高める影響があることが分かった。また、幼少期の仲間集団と親の持つ非親族ネットワークによる関係を持つことで、小学校での人気が高まることを通じて、自己肯定感を高める影響があることが分かった。

仮説1「幼少期に仲間集団と親の持つネットワークによる関係がある人ほどコミュニケーション能力、自己主張能力、自己抑制能力、自己肯定感が高い」とは異なり、親族ネットワークの効果は見られず、自己主張能力、自己抑制能力については影響が見られなかった。しかし、仮説1で考えた通り、家庭・幼稚園・保育園という子ども

にとって選択できない場所だけでなく、地域の子ども同士の仲間集団など、選択的で、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」居場所があり、その中で遊び方や、付き合い方を覚えたり、親の友人の子どもと関わるなどの経験ができることは、子どもの成長にとって良いと考えられる。

仮説2

中学時代の個人の人気は、コミュニケーション能力、自己主張能力、自己肯定感、神経質、話す人の固定化に影響を与えていた。所属するグループの位置づけは、コミュニケーション能力に影響を与えていた。スクールカーストの有無は話す人の固定化、学校の間関係への過度なこだわりに影響を与えていた。このことから、仮説2で考えた通り、学校の環境にコミュニケーション能力(①)、自己主張能力(②)、自己肯定感(④)、他者への依存(⑧)に悪影響がある可能性があると言える。

向社会性(⑤)、他者への非排除性(⑥)、他者への信頼性(⑦)への悪影響については、この調査からは分からなかった。

コミュニケーション能力(①)、自己主張能力(②)、自己肯定感(④)、向社会性(⑤)、他者への非排除性(⑥)が高いことを積極性が高いとする「積極性」については、中学時代の性格・学校生活の影響を除いても、高校時代に学校以外の居場所があれば、現在の積極性を高める効果があることがわかった。中学以下の学校以外の居場所の有無は有意ではなかったため、長く続けることに意味があるか、高校時代の方が良い居場所と出会いやすかったかのどちらかであると考えられる。

また、学校以外の居場所で積極的に人に話しかける経験や、学校のグループに居ないような人と仲良くできるなどの経験があった方が、良い影響が強くなることが分かった。しかし、学校以外の居場所での経験は相互に関係があり、どの経験に効果があるかはこの調査からは分からなかったためインタビュー調査と合わせて考察したい。

学校以外の居場所の存在が、学校の間関係の逃げ道となることや、居場所の存在と居場所の性格により効果的な経験ができることは、学校の問題による①コミュニケーション能力、②自己主張能力、④自己肯定感、⑤向社会性、⑥他者への非排除性、⑦他者への信頼感、⑧他者への依存への悪影響を防ぎ、良い影響を及ぼすという仮説2は、①～⑥については正しいことが分かった。また、学校以外の居場所があることだけでなく、そこでの経験があることで、効果が強くなることが分かった。

他者への信頼性が高く(⑦)、他者への依存性が低い(⑧)ことを信頼性が高いとする「信頼性」については、高校までの居場所にも、大学の環境や学科以外の居場所にも信頼性を効果がないことが分かり、信頼性については、元の性格を変えることは難しいと考えられ、仮説2や3の⑦⑧の部分は否定された。

仮説3

大学では、大学で高校までは仲良くできなかったタイプの人と仲良くできたことや、学科以外の居場所での経験に積極性を高くする効果があることが分かり、またこの傾向は、学年が上がると強くなることが分かった。このことから、大学の環境が効果を及ぼしているかどうかは、この調査からは分からなかったが、大学の学科外の居場所も含めた、大学生活の効果で①コミュニケーション能力、②自己主張能力、④自己肯定感、⑤向社会性、⑥他者への非排除性、⑦他者への信頼感、⑧他者への依存が良い方向になるという仮説3の、①～⑥の部分までは正しいと言える。

仮説1…幼児期に親のもつネットワークや子供同士の仲間集団を持っていることで、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境による経験や、家庭・幼稚園・保育園ではできない経験ができ、コミュニケーション能力(①)、自己主張能力(②)、自己抑制能力(③)、自己肯定感(④)が向上するのではないか。

結果1…①コミュニケーション能力○、②自己主張能力×、③自己抑制能力×、④自己肯定感△

仮説2…家庭と学校以外の居場所があることは、小学校～高校のクラスのスクールカーストや固定されたグループなどの問題の逃げ道となり、次の性格への悪影響を防ぐのではないか。また、スクールカーストや固定されたグループがある環境ではできない経験や、居場所の性格による経験ができることで、次の性格に良い影響があるのではないか。

コミュニケーション能力(①)、自己主張能力(②)、自己肯定感(④)、向社会性(⑤)、他者への非排除性(⑥)、他者への信頼感(⑦)、他者への依存(⑧)

結果2…①～⑥のみ○ ⑦⑧は×

仮説3…大学は、高校までよりも「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境であると言える。また、大学で学科以外の居場所を持つことにより、学科と課外活動の集団をつなぐ、橋渡しの関係を持つことや、居場所の性格による経験ができる。その結果、次の性格に良い影響があるのではないか。

コミュニケーション能力(①)、自己主張能力(②)、自己肯定感(④)、向社会性(⑤)、他者への非排除性(⑥)、他者への信頼感(⑦)、他者への依存(⑧)

結果3… ①～⑥のみ○ ⑦⑧は×

第3節 学生にインタビュー

アンケート調査から、高校までに学科以外の居場所があることには、「積極性」を高める効果があることが分かった。また、大学の人間関係が楽で、今まで仲良くなることができなかったタイプの人と仲良くなることができたことや、大学の居場所での経験は、積極性を高める効果があることが分かった。また、ただ居場所があるというだけでなく、居場所での経験により、影響が強くなることが分かった。

これは、ただ居場所の存在により、「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境ができることだけでなく、居場所の性格によりできる経験があるためであると考えられる。

しかし、アンケートだけでは、居場所での経験同士に相関関係があったため、どのような居場所の性質や、居場所での経験に効果があったのかははっきりとは分からなかったために、インタビュー調査から考察することを目的とし、インタビュー調査を行った。

第1項 高校までに学校以外に居場所があった人へのインタビュー

質問「学校以外に居場所があったことで、良かったことまたは悪かったことがあればお聞かせ下さい」

注：回答者は、大学生

表17 回答者が所属していた居場所の種類

回答者について		所属していた居場所について		
回答者	性別	居場所の種類	規模	雰囲気
Aさん	女性	野外活動	100人程度	仲良いグループで固まることもあれば、チームが決められることも
Bさん	男性			
Cさん	男性	野外活動	30人程度	初対面の人や年上の人と関わることが多い
Dさん	女性	塾	20人程度	グループができている
Eさん	男性	塾	5人程度	小規模でみんなが仲が良い

Aさん 居場所の種類…大学生や社会人が活動を主催する、学校の異なる小学生から高校までの子供たちが集まる野外教育団体に所属。所属時期は小学校中学年から現在(大学生)まで。

「良かったことは、いろいろな人と話す機会が得られたこと。学校のクラスではスクールカーストや固定されたグループがあり、同じ人とばかり話すことが多かった。自分には特定の人だけでなく、いろいろな人と話したいという気持ちがあっても、特定のグループに入らない状況や、どちらのグループかわからないような状況では居場所がなくなってしまう環境だったために同じ人と話さざるをえなかったということもある。

また、クラスを取り仕切るような人とは話しづらいという感覚があった。

学校以外の居場所でも、最初は大人数のため、仲良しグループがあって話す人は固定化されていたが、年齢が上がると少人数になり、今まで関わったことがない人とも関わる機会が増え、仲良くなった。すると、学校の仲良しグループにはいないようなタイプの友人もでき、その友人との接し方を学校の人にも当てはめることで話しやすくなることがあった。クラスを取り仕切る人とも話しやすくなった。」

Bさん 居場所の種類…Aさんと同じ野外教育団体に所属。所属時期は、小学校中学年から現在(大学生)まで。

「良かったことは、自分から積極的に人に話しかけるようになったこと。学校以外の居場所に入る前はおとなしい性格だった。しかし、学校外の居場所では、毎回初対面の子供たちがいることもあり、自分から仲良くならなければいけないという意識になった。それがきっかけで、積極的な自分に気づくことができた。今でも積極的になることができていると思う。」

Cさん 居場所の種類…ボーイスカウトに所属。地域の同年代の子供たちや、年上の子供たちが集まり、野外活動などを行っていた。所属時期は小学校中学年から中学2年生まで。

「居場所に入ったことで、落ち着きがでるようになったと言われる。入る前はやんちゃな性格で、先生に注意されることも多かったが、居場所では年上の人と関わる機会が多く、団体として決められたルールもあり、学校よりも自由にはできない感じがした。そのため、ルールを守らなければならないという意識になって、落ち着きがでるようになったのだと思う」

Dさん 居場所の種類…塾に所属。1クラスの人数は20人程度。雰囲気はどちらかといえばアットホーム。所属時期は高校3年間。

「塾に入って良かったことは特にない。塾では居心地の悪さを感じてしまった。他校の生徒同士でグループができてしまっており、その中に入っていくことができなかった。」

Eさん 居場所の種類…塾に所属。1クラスの人数は5人程度。個人経営だったため、雰囲気はとてもアットホーム。所属時期は高校3年間。

「塾に入って良かったことは、生徒同士で信頼関係を築くことができ、楽しかったこと。異性など、学校にはいないような人とも仲良くなることができた。他校の生徒が多かったが、少人数なのですぐに仲良くなることができた。」

考察

インタビュー調査からも、学校にスクールカーストや、固定されたグループがあることは、話す人を固定化してしまうことが分かった。

AさんやBさんの話から分かるように、居場所の雰囲気が、人に積極的に話かけることができるようにすることがあると考えられる。また、少人数であることや、初対面の人と話す

機会が作られることなどの居場所の性質により、強制的にさまざまなタイプの人と話す機会が作られることがあり、それは「積極性」を高めることにつながっていることが分かった。

Dさん、Eさんの話を比較することから、個人の性格もちろん重要だが、それだけでなく、人数の規模や雰囲気などが話しやすさ、話しにくさを決定することもあることが分かる。

第2項 大学の環境についてインタビュー

質問「大学は高校までより人間関係が楽だと思えますか。楽だと思う方は、どのようなところが楽だと思えますか。楽でないと思う方は、どのようなところが楽ではないと思えますか」

①学科には60人ほどいるが、同じ授業を学科全員で受講する機会はほとんどないという学科の人6人に話を聞いたところ、全員が、人間関係は高校までより楽だと答えた。その理由として、以下が挙げられた。

・グループがいくつかできているが、全員で四六時中一緒にいるわけではないため、力関係を感じることはない。

・たまたま同じ授業を受ける機会が多いと、そこで仲良くなって、一緒に行動するようになり、遊ぶようになったりする。そういった意味でグループはあるが、異なるグループの人と集まっても、グループの違いを気にすることはない。そのため、高校までのクラス内とは異なり、グループ以外の人に壁を感じることはなくなり、仲良くできるタイプの人が増えたと感じた。

・高校までは、クラスの人の目があるので、一人で行動していると、浮いていると思われてしまう。そのため、無理にでも人といなければならぬ気がしていた。しかし、大学では一人でいても何とも思われまいだろうから気にしすぎることはなくなった。

・高校までは、グループの中にも力関係があった。逆らってグループを外されてしまうと、一人になってしまうため、意見が言いづらいことも。しかし、大学では、無理に一緒にいなければいけないこともないため、意見は言いやすいと思う。

②学科が少人数で、同じ授業を学科全員で受講する機会がほとんどという学科の人4人に話を聞いたところ、1人は、高校まではよりいづらか楽だが、高校までとあまり変わらない、3人は特に楽だと感じることはないと答えた。その理由として、以下が挙げられた。

・高校までは、クラスの雰囲気を察して、雰囲気を壊さないように仲良くしなければならぬという意識があった。大学では、一人でいても、誰といても割り切って見てもらえると思うから、いづらか楽だと思う。しかし、学科では、高校までと同じように、全体の雰囲気を察しなければならぬ場面が多々あるため、そんなに楽だと思うことはない。

・学科は少人数にも関わらず、グループができている、そのグループ同士で力関係ができているため、高校までと変わらず、居心地はあまりよくない面もある。

・学科の人間関係が濃すぎる。グループ同士、個人同士の対立、仲間はずれなどもあり、全

く楽だとは思わない。四六時中同じ少人数のメンバーで一緒にいるため、一度誰かを嫌うと、ずっと対立が続いてしまうと思う。

考察

固定されたクラスのようなものがなく、集団への依存が小さい環境であれば、いつも仲良くしている人がいながらも、授業によって仲良くする人が変わるなど、橋渡しの関係が作られることが分かった。それにより、仲良くできるタイプの人が増えるなどのよいことがある。しかし、固定されたクラスのようなものがある環境では、立場の違いができてしまい、話す人が固定化されてしまう。

アンケートの結果と合わせて考えると、仮説3で考えた通り、大学の「個人の自由がある程度あり、集団への依存が少ない」環境が仲良くできるタイプの人を増やし、それが、成長につながっていると考えられる。

第3項 大学の居場所についてインタビュー

質問「大学で学科以外にサークルなどに所属していたことで、成長できたことや、逆に悪かったことがあれば教えてください」

表18 回答者が所属している居場所の種類

回答者の性格		所属する居場所について					
回答者	性別	種類	活動頻度	規模	あまり関わらない人と関わる機会	チームワークを大切ににする	色々な意見を聞いてもらえる
Fさん	男性	アウトドア系	週1程度	60人程度	○	○	○
Gさん	男性						
Hさん	女性	文化系	週1、2程度	70人程度	△	○	○
Iさん	女性	文化系	週3程度	30人程度	△	○	○
Jさん	女性	文化系	毎日	10人程度	×	○	○

Kさん	女性	文化系	週3程度	60人程度	△	○	×
Lさん	女性	文化系	週1程度	20人程度	×	×	△
Mさん	女性	文化系	週2程度	15人程度	×	×	△

Fさん 「よかったことは、いろいろな人と関わったこと。サークルでは、毎回の活動に参加するメンバーもさまざまで、チームが決められる。飲み会や食事会があるが、その席もくじ引きで決められるため、今まで話したことがない人と関わる機会が作られていた。そのため、多くの人と関わることもできた。いろいろな人と話すことで、自分にはない考え方を知ることができる。またそういった人達のよい部分を見習って、行動を変えることもあり、成長できたと感じる。しかしその一方で、大人数の中で固まる人が自由でないことで、一人ひとりと深い仲になる機会に恵まれないこともあると感じる。」

Gさん 「よかったことは、関わるができるタイプの人が増えたこと、自分が話しやすいだけでなく、誰でもいいから話そうと思えるようになったこと。自分から人に歩み寄れるようになったこと。

以前は、人と関わるのが苦手だったし、自分と異なる趣味・タイプの人には壁を作ってしまった。高校のクラスでも大学の学科でも、自分が話やすく、一緒にいる人は、自分と同じような性格・考え方の人しかいなかった。しかし、サークルでは初対面の人とのグループ活動も多かったため、様々なタイプの人と関わることもできた。すると、初対面の人にも自分から話かけることができるような人がたくさん周りになり、自分もできるのではないかという意識になり、徐々にできるようになった。人の影響を受けたのだと思う。

サークルでは、自分を認めてくれたり、受け入れてくれたりする雰囲気がある。自分を受け入れてもらうことができたから、自分も人を認められるようになったと思う。そのおかげで、高校までは、話し合いなどで意見が分かれたら面倒だから言わない、自分と異なる意見を言われるといやだと思うことがあったが、今は自分と違う意見を言われたら、なぜその人がそう考えるのか、その人の立場に立って考え、話し合うことができるようになった。相手と意見が違って、自分の意見が言えるようになった。

大学に入る前から、人と話したいという意識はあった。しかし、スキルはなかった。自分だけでは、変わることができなかったと思うが、サークルの環境などがあって、徐々の変わることができたと思う。」

Hさん 「よかったことは、高校までは壁を作ってしまったタイプの人とも仲良くなるこ

とができたこと。高校までは、クラスの雰囲気のせいもあり、特に異性とは話しをすることが苦手だった。しかし、サークルでは異性の割合が多く、異性同士も関係なく仲良くする雰囲気があった。またもしなければチームを作ることができなかつたため、自分も異性と話すことができるようにした。そうすると、異性とも遊びに行けるようになり、また同性のみと関わるのとは異なった楽しさも感じるなど、世界が広がった」

Iさん「よかったことは、協力し、意見が異なる人とも話しをすることができるようになったこと。サークルは、楽しくできるものであるが、チームで一つの物を作り上げるというものだった。協力しなければ作りあげることにはできないが、それぞれ意見は異なる。だからこそ、意見が異なるから話さないのではなく、お互いに満足できる道を探そうとすることができるようになった」

Jさん「サークルに入ってよかったことは、仲間と信頼関係を築くことができたこと。仲間がいるから頑張ろうと思えた。サークルは、仲間と協力して活動をするが、意見が割れることが多い。ぶつかりあいもあるが、お互いに話し合うことができる雰囲気があったのがよかった」

kさん「サークルに入ったことは特によいとは思っていない。チームワークが強すぎる場所だった。サークルで統一された考え方のようなものがあり、ほかの意見は受け入れてもらえない感じがした。自分は違う意見をもっていたが、受け入れてはもらえず、サークルに入って成長したというより、逆に苦手なタイプの人ができってしまった」

Lさん「サークルに入ったことでよかったことは特にない。サークルでは、集まっても自由に好きな人同士で固まってしまう。飲み会の席なども自由。そのため、自分も苦手な人とは関わらないし、得意な人とだけ話しており、高校までの固定されたグループと同じで、自分にとって成長する機会はなかった」

Mさん「サークルに入ったことでよかったことは特にない。サークルの人間関係は、複雑だった。1学年の人数は少なく、同じ人同士で固まってしまう、距離が近すぎるのが問題だった。いざこざもあった。」

考察

大学生の居場所でも、環境によって人に話しかけやすいかどうかが変わってくるのが分かった。

Gさん、Iさんの話を比較すると、同じチームワークを大切にするような居場所でも、個人を認めてもらうことができるかどうか、多様性を受け入れる雰囲気があるかどうかが大

きな違いになるのではないかと感じた。

多様性を受け入れる雰囲気とは、立場の違いがなく、誰もが意見を言いやすい場であるような雰囲気であると考えられる。

多様性を受け入れる雰囲気があれば、話し合いでは、相談してみんなが納得する方向に持っていこうとすることができ、個人は意見を言いやすくなり、積極的になれるのではないか。また、Eさんの話のように、人に認めてもらうことができる雰囲気があれば、自分も歩みよって意見を言いやすくなる。しかし、力の強い人や、多数派によって一定の価値観を強制されてしまう居場所では、合わない人を生んでしまう。成長につながるというより、人が苦手になってしまうこともある。これは、学校にも同じことが言えると思う。学校は、グループによって一定の価値観を強制されていたりするし、力の強い人や、多数派の意見に合わせなければならないことが多く、合わない人が出てきてしまう。

Dさん・Eさん・FさんとJさんの話から居場所でも、大人数であつたりすれば自然と仲良しグループはできてしまうものだと思う。しかし、アンケートからも、インタビューからも、いろいろな人と話す機会があつた方が、価値観が変わるなど、成長する機会がある。そのような仕組みを作るには、チームや席順を好きな人同士でなくランダムに決めたりして、自然と話す機会を作ることが必要ではないか。

しかし、Aさんの話からも分かるように、人間関係が流動的すぎても、深い仲になることができず、信頼関係が芽生える機会が少なくなってしまうと考えられる。高校までの居場所に関するインタビューのEさんの話からも分かるように、積極性を高めるには、あまり関わりのない人とも関わる機会が多い流動的な環境であることが効果的であると考えられるが、信頼関係を築くには、個人が認められ、多様な意見が認められることが前提での少人数の集団が効果的だと考えられる。

第4節 アンケート調査とインタビュー調査のまとめ

アンケート調査から、高校までに学科以外の居場所があることには、積極性を高める効果があることが分かった。また、ただ居場所があるというだけでなく、どのような経験ができた居場所であつたかどうかにより、効果が異なることが分かった。また、大学で、今まで仲良くなることができなかつたタイプの人と仲良くなることができたことや、大学の居場所での経験は、積極性を高める効果があることが分かった。しかし、アンケートだけでは、居場所での経験同士に相関関係があつたため、どのような居場所に効果があつたのかははっきりとは分からなかつたために、インタビュー調査から考察することを目的とし、インタビュー調査を行った。

インタビュー調査の結果からも、性格だけでなく、環境によっても、人が好きになれるか、人に話しかけやすいかどうかなどが異なると分かった。「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境が、人と関わりやすい経験をさせることがある。それだけではなく、また、居場所の性質として、個人を認めてくれる、立場の違いがなく、誰もが意見を言いや

やすい環境があるがあることが重要であり、そのような居場所にこそ仮説で考えたような効果があると考えられる。

そのような環境であることで、人と信頼関係を築くことができる経験や、自分から意見を言えるようになる経験ができ、それが、「積極性」を高めることにつながるのではないか。

学校では、個人を認めてくれる、立場の違いがなく、誰もが意見を言いやすい環境があるというよりも、スクールカーストという立場の違いがあり、力の強い人や多数派に合わせなければならない場合が多い。それは学校を運営していくためにしかたのないことで変えることはできないかもしれない。選択的な居場所の方が、個人を認めてくれる、多様性を受け入れてくれる雰囲気を作りやすいと考えられる。

しかし、仮説とは異なる点として、仮説では居場所でのある経験がある効果に繋がるのではないかと単純に考えていたが、インタビュー調査からは、居場所での成長は、単純なものではなく、例えば、人に認めてもらえる居場所だったために、人に積極的に話しかけることができるようになったというように、居場所の性質は相互に関連していて、分けて考えることはできないことが分かった。

また、今回のアンケート調査とインタビュー調査を合わせて、積極性（仮説の①コミュニケーション能力②自己主張能力④自己肯定感⑤向社会性⑥他者への排除性）については、高校までの居場所での経験や、大学の環境と居場所での経験によって変わることが分かったが、信頼性（⑦他者への信頼性⑧他者への依存）については、効果はないと考えられた。

しかし、居場所で「人と信頼関係を築くことができた」という人はおり、これは、人を信じることや、人をより好きになることにつながっていると考えられる。信頼性は、幼少期に決まる部分が大きく、データとして現れるほど信頼性は高くなることはないとしても、経験によって、より人が好きになるなど、多少は考え方が変わることもあるのではないか。

どのような居場所によい効果があるのかを考えると、人間関係が固まりすぎず、流動的である方が、コミュニケーション能力や自己主張能力が向上するなど、積極性が高まると考えられる。しかし、少人数である方が、信頼関係は築きやすいと考えられる。どちらにしても、前提として、自分を他者に認めてもらうことができ、立場の違いがなく、誰もが意見を言いやすい環境であることによって、良い効果が得られると考えられる。

第5節 実際の居場所

インタビュー調査から考えたような、自分を他者に認めてもらうことができ、立場の違いがなく、誰もが意見を言いやすい居場所とはどのようなものかを知るため、栃木県内で、若者や子どもの学校以外の居場所となっていると考えられる居場所を見学した。

【1】とちぎ高校生蔵部、【2】多世代型居場所交流事業、【3】自然教室ネイチャーフレンドの3つを紹介したい。

【1】高校生の学校以外のつながりと、家族以外の大人とのつながりが作られている例

（とちぎ高校生蔵部）

とちぎ高校生蔵部は、ボランティアやまちづくりに関心のある栃木県内の 8 校の高校生が、学校の垣根を越えて気軽に集まり、同世代の仲間だけでなく大人とも語り合いながら、高校生の視点による自主的な活動を展開し、栃木市のにぎわいの創出に寄与することを目的として平成 26 年 4 月に設立された。栃木の街散策マップの作成、蔵の街魅力ツアー、栃木市高校生合同文化祭の開催など主に街を活性化させる活動を企画し、実施している。

もともとは、「若者の居場所づくり」を目的とした企画がきっかけだった。

顧問の方は、「家でも学校でも、様々な問題を抱えている若者がいるから、『若者の居場所』が必要だ。若者にとっては、集まる建物があること（ハード）が大事なのではなく、集まること自体（ソフト）に意味があると考えた。学校の垣根を越えて、若者がつながることができる、家と学校以外のサードプレイスを作ることが、この蔵部を作った目的でもあった。蔵部に様々な問題を抱えている若者が集まるというわけではないが、そういった若者にとっても、居場所になれる存在であると思う。学校の垣根を越えて、集まることができるので、閉じられた学校だけでは分からないことも分かり、世界が広がる居場所になると思う。」というお話を聞かせてくれた。

イベントを企画する会議の様子を見学したところ、意見の「多様性」を大事にし、「誰もが発言しやすい」雰囲気であることを感じた。自分から意見を言いづらいメンバーがいても、大人や、会議を進めるメンバーが意見を言う場を作ってくれる。また、出された意見が大事にされる。顧問の方によると、これは、「蔵部のメンバーには、もちろん、経験が多い人、少ない人がいるし、年齢の違いもある。しかし、蔵部のコンセプトとして、そういった立場の違いは関係がなく、誰もが主役になれる場所を目指している。」ためだ。また、「学校では、成功しなければいけないということがあるが、蔵部の活動は、成功を目的とするわけではなく、失敗から学ぶこともある。だからこそ、自由にできる。」

蔵部のメンバーである高校生のお話しによると、「学校の話合いなどでは、きちんとした結論を出さなければいけないということがあるし、最初から出さなければいけない答えがきまっている場合もある。周りに合わせなければいけないと感ずることもある。しかし、蔵部の話では、奇抜なアイデアも面白いからと受け入れられるし、何を言ってもいいと感ずる。」

「初めて会議に参加した人の意見であっても大事にされる。経験豊富な人だけではなく、第三者から見た意見として、重要と思ってもらえる。」

このように、蔵部には、誰もが大切にされる環境がある。だからこそ、蔵部に入ったことで成長できたという話を聞くことができた。

顧問の方によると、「蔵部には、それぞれの立場という前提がなく、色眼鏡で見られることはないから、素の自分を出せる雰囲気があるのだと思う。蔵部に入った当初は、コミュニ

ケーションがなかなか取れなかったのに、活動を重ねるうちにとても積極的になって、自分からボランティアをするようになる子もいた。また、自分にとって苦手なタイプの人も当然いると思うが、そういう人もまとめていかなければならない。そのうちに、苦手ではなく、打ち解けることもある。価値観が変わることもある。」

蔵部メンバー高校生からも、「最初は、初対面の人と関わるのが苦手だったけど、いろいろな大人と関わる機会もあり、苦手意識がなくなった」「学校より、明るいキャラクターの自分になれた、その自分を、学校でも出していけるようになったので、明るくなれたと思う」「自分の考えに、自信が持てるようになった」など、成長したという話を聞くことができた。

【2】小学生の子どもの学校以外のつながりと、家族以外の大人とのつながりが作られている例 (社会福祉法人 A が運営する多世代型居場所交流事業 B)

多世代型居場所交流事業は、年齢に関わらず、誰でも気軽に集まることができる、地域の居場所を作ることを目的としている。お年寄りや、小学生の子どもが来る機会が多い。運営側としては、居場所でやることを決めて、交流を強制的に作るのではなく、来た人が1人にならないように、気を配りながら、来た人がそれぞれに好きなことをする中で、自然に交流が生まれるようにしている。好きなことをしながら、人と関わるができる、家庭のような雰囲気があった。この居場所による子どもたちへの影響として、運営の方からは、「親でない大人から、認めてもらえ、褒めてもらえる環境であり、そのことで、人を好きになっている様子が見られた。」「学校が違う友達ができ、学校の友達とはできない遊びができ、いきいきしている様子が見られた。」という話を聞くことができた。

【3】小学生から社会人までの世代を超えたつながりが作られている例 (自然教室ネイチャーフレンド)

自然教室ネイチャーフレンドは、自然体験活動やレクリエーション活動を通じて、子どもが自然に親しむきっかけを作ることを目的とした環境教育団体だが、栃木県内の様々な小、中、高に通う子どもたちが在籍し、大学生をはじめ、幅広い年齢層のスタッフが運営に関わっており、学校や世代を超えた人々と出会うことによる経験の場にもなっている。

ネイチャーフレンドは、初対面の人や、幅広い年代の人と関わるのできる場所であり、また、年齢という立場に関係なく、仲良くなることのできる場であると考えられる。

子どもたちは、大学生スタッフが決めたグループで活動することや、小学生から高校生の年齢の枠を超えたグループで活動することもあり、初対面の人と関わる機会が多い。このことから、子どもの頃から所属していたメンバーから「自分から人に話かけるようになった」「積極的になった」という話を聞くことができた。また、年齢が上がると、同年代のメンバーも少人数になり、今まで関わったことがなかったタイプの友人とも仲良くなる。このことから、「今まで関わったことがなかったタイプの人と親しくなって、学ぶことがあった」と

いう意見を聞くことができた。

チームに分かれて、自然の中でゲームをすることがあるが、チームの中に大学生など、スタッフが入り、子どもたちの意見を聞きながら活動することがあり、子供たちの考えを大事にする雰囲気を作っていると考えられる。

大学生にとっても、サークルとして学科以外の居場所となっている。あまり関わったことがない人とのグループ活動も多いため、仲良くなることができるという話を聞くことができた。また、子どもたちへの企画を立てるチームに所属すると、5～6人の少人数で、活動の計画を考えるようになり、学年に関係なく、意見が言いやすい環境であるため、意見を言うことに慣れるなど、成長の機会があるという話を聞くことができた。

【4】考察

どの居場所も、年齢や、経験の違いなど、立場が異なる人が集まっていたが立場の違いに関係なく人と関わるることができる場所だった。

特にとちぎ高校生蔵部や自然教室ネイチャーフレンドでは、協力して企画を立てたりすることがあるが、その話し合いの場は、力関係がなく、意見が言いやすい雰囲気であった。自分から意見を言いづらい人に気を配ったり、斬新な意見も面白いと大事にしたり、新しく来た人の意見も、新しい人だからこそ考えられる意見があると大事にしたりという雰囲気が、意見の言いやすさを作っていた。意見を言いやすい雰囲気を作るのは、運営側の意識であることも、構成するメンバーの意識であることもあった。意見が言いやすい環境であることで、自分の意見に自信が持てるようになったという話や、積極的になれたという話を聞くことができた。

また、どの居場所も、学校のように個人のランク付けがされることや、レッテルを貼られることがなく、個人の良いところを認めてもらうことができる場所だった。個人のランク付けがされることや、レッテルを貼られることがないからこそ、立場に関係なく人と関わるることができるのだと考えられる。

多世代型居場所交流事業や自然教室ネイチャーフレンドは、大人が、子どもを褒めたり、認めたりする機会が多く、とちぎ高校生蔵部は、高校生が、地域の大人や、関係者の大人から認められたり、仲間同士で協力する中で認め合ったりする。認められたことで、自分も、人を認められるようになったという話や、自信を持って積極的に行動することができるようになったという話を聞くことができた。

第4章 総括 ～選択的な居場所の必要性について～

第1項 全体のまとめ

私は、幅広い人間関係や、自らが選択して所属する集団を持つことで、「個人の自由があ

る程度あり、集団への依存が小さい」環境ができ、しがらみがあつて集団に依存してしまう環境ではできない経験ができると考えた。

また、居場所の性質は様々であるため、限られた居場所しかない場合にはできない経験ができると考えた。これらの経験によって、人はより成長することができると思った。また、狭い人間関係や、限られた居場所の環境による悪影響を防ぐことができると考えた。

そこで、本論では、アンケート調査とインタビュー調査を通じて、幅広い人間関係や、自らが選択して所属する集団を持つことによる効果と、効果があるような居場所の性質や居場所での経験とはどのようなものかを検証した。

アンケート調査・インタビュー調査の結果から、幼児期の家庭外の居場所、小学校から高校までの学校以外の居場所、大学の環境と学科以外の居場所といった「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境によりできる経験があり、また、居場所の性質による経験があり、それが良い効果をもたらすことが明らかになった。

アンケート調査では、幼児期に、親の非親族の関係者と関わる機会や、近所の仲間集団と関わる機会があることにより、コミュニケーション能力が向上することが分かった。また、高校時代に学校外の居場所があることや、学校以外の居場所で積極的に人と関わる経験や、学校のグループにはいないタイプの人と仲良くなる経験をすることで、学校でうまくいっていない人にとっても、積極性(①コミュニケーション能力②自己主張能力④自己肯定感⑤向社会性⑥他者への非排除性)が低くなることを防いだり、積極性を高めたりする効果があることが分かった。また、大学で高校までとは仲良くなれなかったタイプの人とも仲良くなることや、大学のサークルなどの学科以外の居場所には、積極性を高める効果があることが分かった。

アンケート調査からは、どのような居場所に効果があるのかははっきりとは分からなかったが、インタビュー調査では、自分を他者に認めてもらうことができ、立場の違いがなく、誰もが意見を言いやすい居場所に効果があるのではないかと考えることができた。そのうえで、人間関係が流動的である方が、コミュニケーション能力や自己主張能力が向上するなど、積極性が高まると考えられる。しかし、少人数である方が、信頼関係は築きやすいと考えられる。

また、大学のように「個人の自由がある程度あり、集団への依存が小さい」環境により、人と気軽に関わるができるようになり、仲良くできるタイプの人が増え、それが成長につながるということが分かった。

また、実際の居場所の見学を行ったことで、個人のランク付けがされることや、レッテルを貼られる機会がなく、立場に関係なく人と関わるができる居場所の環境を知ることができた。

以上より、幅広い人間関係や、自らが選択して所属する集団を持つことやそこでの経験による効果をデータをもとに検証し、効果があるような居場所の性質や居場所での経験を考えるという本論の目的はおおむね果たすことができたと言える。

しかし、今回行ったアンケート調査では、小学校から高校までのことについて、回想してもらった形で実施したため、データとして不十分である部分もある。

またアンケートの対象者が、宇都宮大学の教育学部の学生のみで、1・2年生のみが中心であったため、学年の偏りや、学部の偏りが生まれてしまった部分もある。

第2項 おわりに

「結束的な関係」の強い居場所や、拘束的な居場所にも、信頼関係を築くことができるといったメリットはあるが、個人の自由が小さく、集団への依存が大きいことが、個人が意見を言いづらくなるなどの問題を生みやすいため、その逃げ道として、「選択的」な居場所や、「橋渡しの関係」の強い居場所が必要だ。

大学では、その環境から、「橋渡しの関係」が強くなるため、人間関係が楽になりやすいが、高校までは、「結束的な関係」が強い傾向にあるため、個人が抑圧されてしまうことが起こりやすい。そのため、今回取材したような学校以外の居場所に、若者が自ら所属することが良いと考える。しかし、現在、高校生までは、自ら所属することを好んで居場所に所属する機会は少ない。家と学校のみしか居場所がなく、そこで問題を抱えても、逃げ道がなく、相談する相手の少ない若者も多い。例えば、学校の間人関係の問題があったとき、同じ学校の人に相談すればばれて関係がこじれてしまうかもしれない。誰にも相談することができず、抱え込んでしまうことがある。

学校でいじめの被害に合えば、自分を認めてもらうことができる体験ができず、劣等感などをずっとひきずってしまう。

生まれてくる家庭を選ぶことはできないし、学校から、いじめを無くすことや、固定されたグループ、ランク付けなどの問題を無くすことは難しい。そのため、逃げ道となるような、現実の居場所が必要だと考える。

謝辞

本論の作成に当たり、指導して下さった小原一馬先生と、インタビューやアンケートに答えて下さった宇都宮大学教育学部の学生、取材をさせて下さったとちぎ高校生蔵部、社会福祉法人、自然教室ネイチャーフレンドの皆様には感謝申し上げます。

参考文献

住田正樹・高島秀樹著、2011、『子どもの発達社会学』北樹出版
鈴木翔著、2012、『教室内（スクール）カースト』光文社出版
須藤春佳著、2012、「友人グループを通してみる思春期・青年期の友人関係」神戸女学院大学 第61巻第1号、113頁～126頁

- 松田茂樹著，2010，『何が育児を支えるのか 中庸なネットワークの強さ』勁草書房
- 稲葉陽二著，2011，『ソーシャル・キャピタル入門 孤立から絆へ』中公新書
- ロバートパットナム著・柴内康文訳，2000・訳2006，『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房
- 安田雪著，2008，「若者の転職意向と職場の人間関係 上司と職場で防ぐ転職」リクルートワークス研究所研究報告3，32頁～45頁
- 上野千鶴子著，2009，『男おひとりさま道』法研
- 高松正毅著，2006，「現代のコミュニケーション環境とコミュニケーション論をめぐって」高崎経済大学論集 第49巻，105頁～114頁
- 井上健治・久保ゆかり著，1997，『子どもの社会的発達』東京大学出版会
- 長谷川真理，2014，「他者の多様性への寛容 児童と青年における集団からの排除についての判断」教育心理学研究
- 山岸俊夫著，1999，『安心社会から信頼社会へ 日本型システムの行方』中公新書
- エリク・H・エリクソン著・仁科弥生訳，1999，『幼児期と社会』みすず書房
- 岩宮恵子著，2012，『「ぼっち」恐怖と「イツメン」希求 現代思春期・青年期論』金剛出版
- 佐藤有耕著，1995，「高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析」発達社会学部研究紀要 11頁～20頁
- 餅川正雄著，2011，「学校のいじめに関する研究（3）」広島経済大学論集，51頁～70頁
- 森口朗著，2007，『いじめの構造』新潮社
- 小原一馬・平山愛理著，2018，「大学生における、中高時のスクールカースト経験の長期的影響」宇都宮大学教育学部紀要 第68号，105頁～120頁
- 内田由紀子・遠藤由美・柴内康文著，2012，「人間関係のスタイルと幸福感：付き合いの数と質からの検討 実験社会心理学研究 第52巻第1号，63頁～75頁

調査資料

「中高や現在の環境・経験が与える影響に関する調査」

【調査の目的】私は現在、中学、高校、大学の環境やそこでの経験が与える影響について卒業論文を作成しております。ここから得られた回答は研究のみに用い、プライバシーには最大限注意致します。ご協力お願い致します。

1 ①あなたの学部・学科と学年と性別を教えてください

(学部 専攻・課程) ()年 性別(男・女)

②あなたの居住形態についてお答えください 1. 実家生 2. 1人暮らし

③高校までに、転校を繰り返した経験はありますか 1. ある 2. ない

~~~~以下は、当てはまると思う数字に○を付けてください~~~~

#### 2 幼稚園から小学校頃までのあなたについてお聞きします

ア、 近所の子供と遊ぶ機会がありましたか

1. あった 2. なかった

イ、 近所の子供の親や、兄弟と関わる機会がありましたか

1. あった 2. なかった
- ウ、 同じ学校で同じ学年の子供以外で、親の友人の子供と関わる機会がありましたか
1. あった 2. なかった
- エ、 (祖父母だけでなく、いとこなども含む) 親戚と集まる機会がありましたか
1. 月に1回以上 2. 年に1回以上 3. 冠婚葬祭の時のみ 4. ほとんどなかった

### 3 【小学校のクラス】でのあなたについてお聞きします

- ア、人と話すことが苦手だった** 1. はい 2. いいえ
- イ、小さいことを気にしていた** 1. はい 2. いいえ
- ウ、周囲になじめなかった** 1. はい 2. いいえ
- エ、自分の意見は言うほうだった** 1. はい 2. いいえ
- オ、よく先生に注意されていた** 1. はい 2. いいえ
- カ、自信がなくて落ち込むことがよくあった** 1. はい 2. いいえ
- キ、仲間はずれをしたことがあった** 1. はい 2. いいえ
- ク、いつも同じ人と話をしていた**
- 1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない
- ケ、クラスでは人気がある方だった**
- 1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない
- コ、学校にはポジティブなイメージがあった**
- 1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない

### 4 【中学校のクラス】でのあなたについてお聞きします

- ア、人と話すことが苦手だった** 1. はい 2. いいえ
- イ、小さいことを気にしていた** 1. はい 2. いいえ
- ウ、周囲になじめなかった** 1. はい 2. いいえ
- エ、自分の意見は言うほうだった** 1. はい 2. いいえ
- オ、よく先生に注意されていた** 1. はい 2. いいえ
- カ、自信がなくて落ち込むことがよくあった** 1. はい 2. いいえ
- キ、仲間はずれをしたことがあった** 1. はい 2. いいえ
- ク、いつも同じ人と話をしていた**
- 1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない
- ケ、学校での人間関係が失敗しないよう、強く心がけていた**
- 1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない
- コ、クラスでは人気がある方だった**
- 1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない
- サ、学校にはポジティブなイメージがあった**

1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない

## 5 【高校のクラス】でのあなたについてお聞きします

- ア、人と話すことが苦手だった** 1. はい 2. いいえ
- イ、小さいことを気にしていた** 1. はい 2. いいえ
- ウ、周囲になじめなかった** 1. はい 2. いいえ
- エ、自分の意見は言うほうだった** 1. はい 2. いいえ
- オ、よく先生に注意されていた** 1. はい 2. いいえ
- カ、自信がなくて落ち込むことがよくあった** 1. はい 2. いいえ
- キ、仲間はずれをしたことがあった** 1. はい 2. いいえ
- ク、いつも同じ人と話をしていた**

1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない

## ケ、学校での人間関係が失敗しないよう、強く心がけていた

1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない

## コ、クラスでは人気がある方だった

1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない

## サ、学校にはポジティブなイメージがあった

1 とてもそう思う 2 まあまあそう思う 3 あまりそう思わない 4 全くそう思わない

## 6 小学校～高校時代の学校の環境についてお聞きします

### 【小学校について】

|                                                                        |                                              |
|------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------|
| ①スクールカーストはありましたか？                                                      | 1. はっきりとあった 2. なんとなくはあった<br>3. 全くなかった        |
| ②①で1または2と答えた方にお聞きします。自分の所属するグループは、クラスでどの位置にいると感じていましたか？<br>(発言力、存在感など) | 1. どちらかといえば上の方 2. 中くらい<br>3. どちらかといえば下の方     |
| ③学校で、自分らしく振舞えないと感じることはありましたか？                                          | 1. とてもあった 2. まあまああった<br>3. あまりなかった 4. 全くなかった |

### 【中学校について】

|                                                                        |                                              |
|------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------|
| ①スクールカーストはありましたか？                                                      | 1. はっきりとあった 2. なんとなくはあった<br>3. 全くなかった        |
| ②①で1または2と答えた方にお聞きします。自分の所属するグループは、クラスでどの位置にいると感じていましたか？<br>(発言力、存在感など) | 1. どちらかといえば上の方 2. 中くらい<br>3. どちらかといえば下の方     |
| ③学校で、自分らしく振舞えないと感じることはありましたか？                                          | 1. とてもあった 2. まあまああった<br>3. あまりなかった 4. 全くなかった |

### 【高校について】

|                   |                          |
|-------------------|--------------------------|
| ①スクールカーストはありましたか？ | 1. はっきりとあった 2. なんとなくはあった |
|-------------------|--------------------------|

|                                                                    |                                                        |
|--------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------|
|                                                                    | 3. 全くなかった                                              |
| ②①で1または2と答えた方にお聞きします。自分の所属するグループは、クラスでどの位置にいると感じていましたか？（発言力、存在感など） | 1. どちらかといえば上の方      2. 中くらい<br>3. どちらかといえば下の方          |
| ③学校で、自分らしく振舞えないと感じることはありましたか？                                      | 1. とてもあった      2. まあまああった<br>3. あまりなかった      4. 全くなかった |

## 7 小学校～高校時代の経験についてお聞きします

(1) 学校と家の他に、居場所がありましたか

例【ボーイスカウト、自然教室、スポーツ団体、習い事、ボランティアなど】

|      |                     |
|------|---------------------|
| ①小学校 | 1. あった      2. なかった |
| ②中学校 | 1. あった      2. なかった |
| ③高校  | 1. あった      2. なかった |

(2) (1)の①～③のうちあったと答えた項目のある方にお聞きします。

そこで、以下のような経験はありましたか。

|                                                                                       |                                                              |
|---------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|
| ①初対面の人と出会う機会があった                                                                      | 1. よくあった      2. まあまああった<br>3. あまりなかった      4. 全くなかった        |
| ②いつも同じメンバーといることが多かった                                                                  | 1. とてもそう思う      2. まあまあそう思う<br>3. あまりそう思わない      4. 全くそう思わない |
| ③もし嫌になったらすぐやめるか続けるかは自分の自由にできた                                                         | 1. はい      2. いいえ                                            |
| ④自分から積極的に人に話かけることができた                                                                 | 1. あった      2. なかった                                          |
| ⑤学校のグループにいないような人と仲良くなることができた（例 学校で親しい友人はみんなおとなしいが、習い事では明るい友人がいる）                      | 1. あった      2. なかった                                          |
| ⑥チームワークを大切にする場所だった                                                                    | 1. とてもそう思う      2. まあまあそう思う<br>3. あまりそう思わない      4. 全くそう思わない |
| ⑦人間関係は、学校の中だけでなく、居場所にもあると安心することがあった                                                   | 1. よくあった      2. まあまああった<br>3. あまりなかった      4. 全くなかった        |
| ⑧仲間や大人から褒められたり、認められたりすることがあった                                                         | 1. よくあった      2. まあまああった<br>3. あまりなかった      4. 全くなかった        |
| ⑨学校よりも明るい、積極的、自信が持てるなど生き生きとした自分だった<br>：注 特に変わらない人は3に、学校よりも窮屈で、気を使っていたという方は4に○を付けてください | 1. とてもそう思う      2. まあまあそう思う<br>3. あまりそう思わない      4. 全くそう思わない |
| ⑩役職についたり、リーダーシップを発揮したりする機会があった                                                        | 1. あった      2. なかった                                          |

## 8 大学でのあなたについてお答えください

|                                                                            |                                                                |
|----------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------|
| ①高校までよりも、人間関係が楽だと思う<br>(例 高校までは、クラスの誰かに嫌われたらクラス全員に嫌われるとおびえたことがあったが、今はないなど) | 1. とてもそう思う<br>2. まあまあそう思う<br>3. あまりそう思わない<br>4. 全くそう思わない       |
| ②高校までは仲良くなれなかったタイプの人とも仲良くなることができた (高校まではおとなしい友人しかいなかったが、大学では、明るい友人ができたなど)  | 1. とてもそう思う<br>2. まあまあそう思う<br>3. あまりそう思わない<br>4. 全くそう思わない       |
| ③学科以外に居場所があった (サークル、ボランティア、アルバイト、習い事など)                                    | 1. はい 2. いいえ                                                   |
| ④高校までの友人と今も仲が良い                                                            | 1. とてもあてはまる<br>2. まあまああてはまる<br>3. あまりあてはまらない<br>4. まったくあてはまらない |

## 9 8の③で学科以外に居場所があると答えた方にお聞きします。その居場所で以下のような経験はありましたか

|                                                                                       |                                                |
|---------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------|
| ①初対面の人と出会う機会があった                                                                      | 1. よくあった 2. まあまああった<br>3. あまりなかった 4. 全くなかった    |
| ②いつも同じメンバーといることが多かった                                                                  | 1. とてもそう思う 2. そう思う<br>3. あまりそう思わない 4. 全くそう思わない |
| ③もし嫌になったらすぐやめるか続けるかは自分の自由にできた                                                         | 1. はい 2. いいえ                                   |
| ④自分から積極的に人に話かけることができた                                                                 | 1. あった 2. なかった                                 |
| ⑤学科のグループにいないような人と仲良くなることができた (例 学科で親しい友達はみんなおとなしいが、サークルにはテンションが高い友達がいるなど)             | 1. あった 2. なかった                                 |
| ⑥チームワークを大切にする場所だった                                                                    | 1. とてもそう思う 2. そう思う<br>3. あまりそう思わない 4. 全くそう思わない |
| ⑦人間関係は、学科の中だけでなく、居場所にもあると安心することがあった                                                   | 1. よくあった 2. まあまああった<br>3. あまりなかった 4. 全くなかった    |
| ⑧仲間から褒められたり、認められたりすることがあった                                                            | 1. よくあった 2. まあまああった<br>3. あまりなかった 4. 全くなかった    |
| ⑨学科よりも明るい、積極的、自信が持てるなど生き生きとした自分だった<br>:注 特に変わらない人は3に、学科よりも窮屈で、気を使っていたという方は4に○を付けてください | 1. とてもそう思う 2. そう思う<br>3. あまりそう思わない 4. 全くそう思わない |
| ⑩役職についたり、リーダーシップを発揮したりする機会があった                                                        | 1. あった 2. なかった                                 |

## 10 現在のあなたについてお答えください

(1とてもそうだ 2だいたいそうだ 3あまりそうではない 4まったくそうではない)

|                                                                   |   |   |   |   |
|-------------------------------------------------------------------|---|---|---|---|
| ①初対面の人との会話は苦痛でない                                                  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ②自分が詳しくないジャンルの話題にもついていくことができる                                     | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ③大学を卒業し、社会に出て新しい人と会うことは楽しみだ(不安だという人は3または4)                        | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ④自分から人を遊びや食事に誘う方だ                                                 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑤学科やサークルは一緒だが、あまり親しくない人とでも挨拶をする方だ                                 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑥学科などは同じだが、関わりのない人とグループ活動や食事会などで一緒になることはポジティブにとらえる方だ(仲良くなるチャンスなど) | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑦興味がないことでも、黙って相手の話を聞くことができる                                       | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑧自分で悪いと思ったことはしない                                                  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑨他人と違う意見でも言うことができる                                                | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑩間違っていると思ったら、友人を注意できる                                             | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑪忘れ物をした友人や、欠席をした分のノートがない友人など、困っている友人がいたら積極的に助ける                   | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑫知らない人が物を忘れて、落としたりした場合など、自分と関わりを持つ可能性がない人が困っているところを見かけても積極的に助ける   | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑬仲の良い友人が、だれかを無視しようと思ったら従うと思う                                      | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑭自分とタイプの違う人(グループや性格の明るさ、テンションや考え方の異なる人)でも壁を作らない                   | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑮仲間外れにされても仕方ないと思う人がある                                             | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑯自分には、優れた部分や、人に好かれる部分があると思う                                       | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑰友人の小さな態度の変化から、自分に対する感情が不安になる                                     | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑱仲の良い友人でも、自分を嫌いになるのではと不安になることがある                                  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑲仲のよいグループの友人と仲たがいの場合、自分は一人になると思う                                  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑳多くの友人と付き合いより、数少ない友人を大事にするほうだ                                     | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ㉑現在幸福だと感じる                                                        | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ㉒自分の出身地に愛着がある                                                     | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ㉓一人でいることは何とも思わない                                                  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ㉔少しのことで深くなやむ                                                      | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ㉕物事の良い面に目が向く方だ                                                    | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ㉖落ち込みやすい                                                          | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ㉗約束は守る方だ                                                          | 1 | 2 | 3 | 4 |



|                       |   |   |   |   |
|-----------------------|---|---|---|---|
| ㉘真面目に努力する方だ           | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ㉙好奇心旺盛だ               | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ㉚周囲の評価を気にする           | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ㉛ツイッターなどの SNS をよく利用する | 1 | 2 | 3 | 4 |

### 11 あなたの幼少期の家庭環境についてお聞きします

- ア、厳しすぎると感じるがあった                    1. はい                    2. いいえ
- イ、もっと構ってほしいと感じることがあった                    1. はい                    2. いいえ
- ウ、兄弟や姉妹とよく比較された                    1. はい                    2. いいえ

**質問は以上になります。ご協力ありがとうございました。**

**教育学部 総合人間形成課程 地域公共領域4年 川崎志織 担当教員 小原一馬**